
エクス・ニヒロ

もなか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エクス・ニヒロ

【Nコード】

N0879Z

【作者名】

もなか

【あらすじ】

香港で男でも女でもない 天使 に出会い、パートナーにすることにしたクロード。だが、他の 天使 に惹かれてゆき…（第一話）男性と独自設定の両性具有の恋愛を描く、一話ごとに主人公が変わる連作形式の近未来耽美ファンタジー。「エンジェルサイト」の姉妹編。どちらからでも読めます。週1更新予定。

従来の両性ではありません／ややBL的に見えるかもしれませんが比較的男女（異性愛）に近いです／微量の性描写あり／微量のBL（男×男）要素もあり。苦手な方は移動してください！！

評価・レビューは受け付けておりません。感想は歓迎

同性愛と異人種に寛容であることを、教養の証明として嘯うそいてみせる人間でも、それが我が子となるとそうはいかない。

クロードは今回の極東マネージャー就任を、自分の性癖に業を煮やした両親による厄介払いなのだと考えていた。

女性を愛せず、いくつになっても一人でいる息子の顔を見るだけで、彼らはまっとうに生殖した自分たちの存在を否定されたように感じるらしい。

だがもはや、自分は彼らを喜ばせようとは思わないし、自分の彼らに対する信用も向こうのこちらに対するそれよりひどいものであるから、この後に及んでクロードは父である社長の命令に意義を申し立てはしなかった。

ただ、香港という未踏の地での生活に若干の、いや多大な不安だけを抱いていた。赴任した西洋人がノイローゼになったなどという話は返還前の昔から枚挙にいとまがない。住居から使用人、その他生活に関するあらゆること全てに不自由はさせないなどと、大仰に請け合った父の言葉など半信半疑である。

しかし、ホテルのロビーに現れたコーディネーターの姿を見た瞬間から、その疑いはいくらか薄れつつあった。

父は住宅や使用人の手配といった一切合財を、とある会社に頼んでいた。その社員とクロードは今日、顔を合わせるようになっていた。

クロードが予想していた人物は、訛りがひどくて聞きとりづらい英語を喋る、まるで自分の好みではない愛想の悪い中年以上の香港人の男、あるいは女であったが、自分を訪ねてきた人物は、予想に反して白人の若い男、それもかなりの美男子だった。彼の英語の発音は、ぴりぴりしていたクロードの神経をほつとさせた。

「ルイス商会のフォークスです」

男が名乗り、こちらの名前を確認した。外に朝食をとりに行こうというのについていく。相手が自分を姓で呼ぼうとするのに、ファーストネーム知りたさに「クロードでいいです」とやや押し付けがましく言う。「あなたは？」

「サウイン」

彼はそう言った。サウイン・フォークス。

「変わった名前だ」

「よく言われます。あなたもフランス人みたいな名前ですね」

「よく言われる」

サウインは中環の街を歩いていき、一軒の店に入った。香港で知らない者はない、老舗のティールーム。白い上着を着た店員に二階席に案内された。紫檀の壁や年季の入った木製の什器といった内装のレトロさに、知りもしないのに「百年前の上海のよう」だとクロードは思う。壁にかかった時計は二十世紀に止まったままなのではないだろうか？

慣れているのか、サウインは適当に点心を注文し、「ここポレイの普洱茶は絶品です」と、金属のポットから茶を注いでくれた。その様子からクロードは、若いとと思っていた彼が見た目ほど若くないのかもしれない、と考えた。自分よりいくつも年下　そう、せいぜい二十代半ばくらいだろうと考えていたが、容貌が若々しいだけで、あまり変わらないのかもしれない。

サウインの栗色の髪と鶯色の瞳、目が大きく鼻梁が細い顔立ちを彼を少年じみた雰囲気に見せていた。長めの前髪を細い指で梳くような仕草も、また。おまけに、東洋人のようなところは見受けられないのに、どこか東洋的な印象を見る者に与えた。香港での暮らしが長いのだろうか。

「香港島は道に迷いやすい。高低差が激しいし道が入り組んでいますからね。上り下りと方角をセットで覚えないうがよい。頭でなく体で覚えないと香港は歩けません　ああ、ナビがある？　それでも迷うのですよ。不思議です、この街は……」

サウインが話すのに頷きながら、クロードは彼の声と姿を堪能した。長い箸で点心を摘む動作の優雅なこと。

銀色のポットの表面に、おぼろげに自分の姿が映った。少しクセのある褐色の髪をした、やや甘いマスクの男が。ほれぼれするような美男子ではないかもしれないが、他人を魅了する自信はそれなりにある。異性も、同性も。

「お住まいになるのも、工場も九龍半島ですが。お住まいは九龍塘ガオルントンにご用意しました。MTRに乗るのも、買い物などにも便利です。我々の事務所はそこから東に行った九龍城ガオルンセンにあります。車でしたら十五分もあれば行き来出来ます」

クロードはサウインの左手に目を止めた。人差し指に幅の広い刻印入りの指輪をしている。えらく古めかしいデザインだ。それに薬指にも指輪が。何たることか。いや、結婚しているとは限らない……

「指輪は陶磁器を買う時に必要なのです」

クロードの視線に気付いたサウインは、左手を顔の高さに上げて指輪を見せるようにした。

「こうしてカップなどの縁を叩いて音を聞きます。中にひびがあったりするとその部分の音が違う」

サウインは茶器を取り上げ、左手の指輪でコツコツと縁を叩いてみせた。

「もともとは骨董商だと聞いているけど」

景德鎮などの中国の陶磁器は昔から英国でも好まれていた。そういったものを扱っていた会社なのだろう。もしかすると、大陸の盗掘品を香港で買い付けるといふような、後ろ暗いこともなされていたかもしれない、とクロードは想像する。貴人の墓から掘り出された貴重な埋葬品が、そうして世界各地に散らばったのだ。

「そうです。今は骨董以外も扱っています。生活全般にわたって不自由な思いをされないようにお世話させていただきますよ。衣食住の全て、娯楽……恋愛に至るまで、何もかも」

「何もかも？」

恋愛という語にクロードの期待は否が応でも高まった。そうだとサウインは微笑む。

「香港へようこそ」

茶室を出る時、ターバンを頭に巻いたインド人のドアマンがドアを開けてくれたのを見て、クロードは大英帝国の栄華の残滓を見た気がした。

「尖沙咀にはインド人が多いです。北へ行くほど西洋人は少なくなチムサアチヨイる。仕事の関係でしょうが、西洋人は香港島に多い。洒落た店もこちらのほうが多いですね」

ホテルに戻るとルイス商会の車が自分たちを迎えに来ていた。チエックアウトを済ませ、車に乗り込むと、先ず事務所に行くとサウインは言った。

中環から九龍城まではそれなりに時間がかかった。車中でクロードは、これからの生活がどうなるのか、ぼんやりと考えていた。

九龍半島・新界にあるサプリメント工場が新しい自分の職場である。父の会社が先代から着手した漢方サプリの製造は順調に利益を上げていた。返還前に多くの企業が沈む船から逃げ出すネズミのように香港から撤退したのはもはや遠い昔の話で、現在の香港は好景気の真つただ中にある。それもこの地が「龍脈」の通る、よい「気」のみなざる場所だからなのか。

窓の外に流れる景色にはロンドンでは生育出来ないような南国の植物が見られた。人口が過密なため建ぺい率も相当なもので、何十階建てなのか分からないような高層住宅が立ち並んでいるのが目を引く。異国なのだ、と思う。そもそも、秋だというのに真夏のような暑さだ。

そのことをサウインに告げると、「暑さと台風にはだけは閉口すると肩をすくめた。

「しかし、冬でもあたたかくて雪が降りませんし、台風ももう大丈夫でしょう。ああ、もう着きます」

車が止まったのは、黒く細長いビルの前だった。一見すると香港らしくない外観の建物の、ファサードの庇の上に金色の龍が載っている。サウインについて中に入ると、ホテルのレセプションのような小さなカウンターがあり、サウインはそこにIDカードを提示した。サウインは素通りだったが、クロードは軽く身体検査をされたので驚いた。

「あなたにもあとでIDをお作りします」

サウインはそう言って奥のエレベーターホールへクロードを手招きした。通路にはきつと、カメラの類が仕掛けられているに違いない。

「このビル全体が我が社の持ちものでしてね。九龍城砦がなくなつてから、尖沙咀の重慶大廈チンキン・マンションが新・九龍城などと呼ばれたりしているようですが……我々はここが新しい九龍城だと思っています」

エレベーターの中で、サウインは冗談とも本気ともつかないことを言った。

「下のほうの階には飲食店やコンビニエンス・ストアなどの店が入っています。ヘアサロンやエステもありますし、両替も出来る。宿もありますし、一部の階は住居になっていて、住んでいる者もいます」

サウインの説明に頷きながら、便利なのだな、と感心する。えらく長く感じられた移動は、最上階に着いてようやく終わった。

「ここが事務所？」

「いえ、違うのですがお引き合わせしたい人がいましたね」

サウインはカードを使って目の前の扉を開いた。セキュリティの厳重さにクロードは感心を通り越して呆れかけていた。それとも香港ではここまでしななければならぬのだろうか？ 現在の治安がそこまで悪いとは聞いていないが。

扉の向こうには、ホテルマンのような黒いチャイナスーツ姿の香港人の青年が待っていた。サウインの顔を見るとうやうやしくあいさつし、マダムがお待ちです、と言う。マダムだった？

見ると、エントランス・ロビーのソファに、女性らしき髪の長い人物が座っていた。青年と同じような黒いスーツを身につけているその人物は、立ち上がってこちらに近付いてきた。

「空中庭園　のマネージャー、ソーラーヤです」

クロードも名乗ってよろしく、と握手を交わした。が、それにしても、近くで見ると驚くほどの麗人である。

靴のせいもあるのだろうが、長身で青年と身長が変わらない。象牙色の秀でた額の下には琥珀色の大きな瞳が神秘的な輝きを放ち、細い鼻梁と薄い唇の造形は精緻すぎて人形のように。栗色の長い髪は肩の辺りから緩く巻かれて胸に垂らされている。化粧はしていないようだったが、あまりにも完璧なその美には、何ひとつ加えるものなどないのだろう。

エキゾチックな風貌からして混血のように見えたが、それより何より麗人が女性ではないことに気付き、クロードは動揺していた。ソーラーヤのすらりとした体には、少年のように胸の膨らみがなかったのである。

「あの、こちらはいい……」

クロードは不躰な視線をさんざんソーラーヤに注いでしまったあとで、ようやくこれだけの言葉を口にした。

「アロマサロンです。私はこれでもセラピストです。スクールもやっていますので、生徒もたくさんいます。生徒と一緒に受講していただくことも出来ますよ。広東語や工夫茶など、アロマ以外の授業もあります」

「はあ」

拍子抜けしたクロードは、間抜けな声しか出せなかった。アロマセラピーのためにわざわざ香港まで来たわけではない。

「小蜜が必要な時はここの生徒を借りるのです」

広東語なのか、サウインは不思議な単語を口にした。

「シウミー？」

「リトル・ハニー。愛人です。香港の骨董商が大陸と商売する時に

必要なのは、貴金属のアクセサリーにスイス製の高級時計、そして若い愛人」

陶磁器の買い付け時に必須だという指輪と腕時計を見せるように、サウインは左手を上げた。からかわれているのだと思い、クロードは軽く首を横に振って肩をすくめた。

「マダムのような美人揃いで、マダムより若い。ご用命の際は、いつでもご連絡を」

サウインが紋切り型の営業トークをするのに反射的に頷きながらも、クロードは「いや、私は……」と口ごもった。愛人の世話などけっこうだ。女など用はない。はつきりそう言おうとすると、さえぎるようにサウインが口を開いた。

「生徒に女性はいません」

クロードは息を飲み、ソーラーヤを見た。女性ではない麗人を。

「ですが、男でもない」

エンジェルサイト、とソーラーヤの唇が言葉を形作った。

「ここには天使のいる眺めが 天国の蜜があるので」

サウインに送り届けられ、九龍塘の自宅にたどり着いた時、クロードは何もせずに眠ってしまいたいほど疲れ切っていた。

幸い、部屋には必要な家具や電化製品がひととおり揃っており、今日は食事をして寝る以外のことはしなくてよかったので、スーツケースを開けるだけでどうにかなった。

空中庭園 でソーラーヤとサウインに聞かされた話は、にわかには信じ難いことだった。

ソーラーヤたち 空中庭園 の住人は、エンジェルサイト 正式には 天使属 と呼ばれる、ホモ・サピエンスとは異なる人種系統と性形態を有する第二の人類 だというのである。

ソーラーヤをはじめとする 空中庭園 の住人全員がその 天使属で、且つ男でも女でもない 間性 なのだという。

空中庭園 の会員の多くはルイス商会のお得意さまである西洋人の名士で、ちょっとしたジェントルマンズ・クラブの様相を呈している。会員のお目当てはたいいてい、アロマセラピーよりも若く美しい生徒たちとの交流である。

その昔、英国では、あるジェントルマンズ・クラブの集まりを、娼館と間違えた（いい歳をした男ばかりが建物に入っていくので）などという笑い話があったが、これでは、まるで娼館ではないだろうか？

だいたい、リトル・ハニーとは。十九世紀の香港島の娼館は蜂蜜屋と呼ばれていたのである。洒落にならない。

ルイス商会と 空中庭園 にはあまりかわらないほうがいいクロードの頭の隅で本能が危険信号を発していた。

だが、サウインの顔が頭から離れず、さらにはソーラーヤが漂わせていた蜜の匂いが、クロードを誘惑していた。

香港支社のスタッフの態度は予想どおりのものだった。特別友好的でもないが、特別反抗的というわけでもない。「極東マネージャー」などという役職が、お飾りでしかないとよく分かっているのだ。これで現場に対して横暴な態度をとったら反感を買うだろうが、おとなしくしていれば本物のマネージャーも誰も文句を言わないだろう。

クロードの仕事は極言すれば、毎月の生産計画や新製品の開発にイエスと言うだけ。あとはコンピュータでゲームでもしていればいいという閑職である。出勤しなくとも、ある程度の仕事は自宅でも出来る。

このままでは暇を持てあますと思ったクロードは、サウインに連絡をとった。広東語を習ってはどうかと彼はすすめてきた。

「我が英国はとうの昔にこの地の支配者ではなくなりました。その国の言葉が分からない外国人は軽んじられますよ」

それもそうかと思い、空中庭園 に出向くことにした。

クロードは 空中庭園 の生徒三人と一緒に、広東語を習うことになった。

生徒たちに対面した時、クロードはソーラーヤと会った時同様に衝撃を受けた。

「イーレイです」

「シーリンです」

「イエルエルです」

一人は金色、一人は赤、一人はピーコックグリーンのような深い緑色の中国服を着た生徒たちは、全員がとびきりの美人で、間性だった。

三人とも目が大きく鼻梁が細く、それほど彫りの深くない西洋人と東洋人の混血のような容顔で、筋肉がつく前の少年のようにほっそりとした体つきをしている。身長もさほど高くない。一番高いイーレイで一七〇センチあるかないか。年齢はイーレイが二十二歳、

シーリンとイエルエルが十九歳。ショートヘアのイエルエル以外は肩ぐらいまでの長髪で、全員、左の手首に翡翠の腕輪をはめていた。彼らは女性的な雰囲気を持っていたが女性とは何かの違い、女装の男や性転換者とも違っていた。ならばどんな感じなのかというところ、まさしく「天使のよう」としか言いようがなかった。彼らは自分たちホモ・サピエンスとは違う人類なのだ。クロードは何が何だか分からないままに、そのことを認識した。

草花や鳥をあしらったモリス・デザインの壁紙やアンティークの家具で英国調に設えられた応接室に案内され、ソラーヤの執事だという香港人青年から三十分ほど講義を受けると、生徒たちは麻雀をしようと言い出した。勉強しに来たはずだったが、と思いなगरらも、ルールを教わることにした。楽しまなければ損だ。クロードはすでに、空中庭園 の高額な入会金を払ってしまっていた。

茉莉花茶ジャスミンティーの椀を片手に、ドライマンゴーやパンダの形のクッキーをかじりながら牌をいじる三人の美人は、なぜか本物の中国人より「らしく」見えた。そんな馬鹿なことにはないはずなのに。ここはクロードが知っているどんな奇妙な場所よりも、はるかに奇妙なところだった。

以来、クロードは週に二回ほど、空中庭園 に通うようになっていた。広東語はろくに覚えられなかったが、生徒たちのことは覚えていった。

最初は服の色でしか見分けがつけられそうになかった三人の個性も、徐々に分かってきた。

イーレイは金褐色の髪をしており、一番年かさなだけあって一番大人びている。栗色の髪のシーリンとイエルエルは年齢より幼い感じで、食べることはばかり考えているため、中華料理のメニューの漢字を覚えることに余念がない。

いかがわしさを感じていないわけではなかったが、娼館というよりむしろ、ペットを飼えない者が猫のいるカフェに行くのに近いものを感じた。

こつ言ったらソーラーヤは怒るだろうが、彼らはめずらしい動物なのだ。パンダのような。

シーリンとイエルエルを見ていると、クロードは子パンダが遊んでいるのを眺めているような気分になった。二人はベルギーのブリュッセル出身で、二人だけでフランス語で話しているのを聞いていると、小鳥がさえずっているようだった。

イーレイは三人の中で唯一ロンドンの出身だったせいから、積極的にクロードと話したかった。

「君たちの名前は変わっているね」

レッスン後にシーリンとイエルエルが出かけてしまったある日、クロードはイーレイと二人きりでお茶の席を囲んだ。

「私の名前は『第七天』という意味です。スラブ人たちが信仰した鳥たちの天国。シーリンもスラブ人が信仰する天国にいる鳥の名前。イエルエルは産褥の魔除けの天使の一人。ソーラーヤの意味は、明けの明星」

イーレイが淀みなく説明する名前の来歴にクロードは啞然とし、あることに思い当った。

「……サウインは？」

「サウインは、ハロウインのもとになったドルイドの祭りです」

天使属。サウインもだったとは、気が付かなかった。

「姓はないの？」

「ないんです。だから、会社の人たちは好きな姓を名乗ってる」

サウイン・フォークス……たぶん、ガイ・フォークスからとったのだろう。闇の中でガイ人形を燃やす炎の色が、クロードの脳裏にちらついていた。

「第七天に明けの明星とは、すごいな」

「天使ですから。でも人間だって、ミカエルとかガブリエルってつけるでしょう」

「それもそうだな」

明けの明星……金星、ヴィーナスか。クロードはソーラーヤの麗姿

を思い浮かべた。美の権化のような人にふさわしい名前ではないか。
「そう。あの人はでも、ヴィーナスというよりイシユタルかな。聖
娼と呼ばれた巫女たちにかしずかれ、唯一の神に悪魔に落とされた
……」

この世のことを話していると思えない。眩暈がしそうになり、ク
ロードはイーレイの腕輪を指差した。

「それは、翡翠？」

「そうです。露店で買ってきた安物だけど、面白いから皆でつけよ
うって。中国の女神、西王母には玉女……翡翠の乙女という五人の
侍女がいて、赤、黄、白、黒、緑の服を着ているっていうから、私
たちもそれに合わせているんです」

「それで、君は黄色とか、金色の服なのか」

イーレイは頷いた。ということは、まだ会っていないが、白と黒
もいるということになる。

「ファンタジーの世界だな」

「ええ。ここは地上とは違う世界」

イーレイは琥珀のような瞳でクロードの目を覗き込んだ。別の世
界にいざなうように。

だが、イーレイの発した問いがクロードを現実に引き戻した。

「サウインが気になりますか？」

クロードは返答に詰まった。

「あの人は、やめておいたほうがいいと思うけど。子どももいるし
「そうなのか……若いのに」

薬指の指輪を思い出し、クロードはため息をついた。確かに「同
類」の匂いを感じたと思ったのに。

「彼は間性しか相手にしないから」

イーレイの言葉に驚き、ではなぜ子どもが、と問おうとすると、
ドアが開いてシーリンが入ってきた。

「見て。ドレスが出来た」

赤い膝上丈のチャイナドレスを着たシーリンが、ストールを手に

クロードたちの前でぐるりと回った。空気をはらんだ布がふわりと動き、天女の羽衣のように見えた。

シーリンは向かい側の席に腰を下ろすと、足を組もうとした。

「パンツ見えるよ」

イーレイが注意すると、たちまちシーリンは決まり悪そうに居ずまいを正した。恥じらう仕草など少女のようだ。

「チャイナドレスは気をつけないと」

「パーティーの時はストラックスをはくから」

シーリンはストールを膝の上にかけて足を隠し、テーブルの上に手をのばしてサンドウィッチを摘んだ。

再びドアが開くと、ラフな服装をしたイェルエルが現れた。荷物持ちをさせられていたのか、店の袋やパンダの顔を模した鞆などを、シーリンに押し付ける。

二人がフランス語でかしましく喋り始めたのを、遠くのノイズのように聞きながら、クロードは先ほどシーリンが口にした「パーティー」のことを考えた。クロードもソーラーヤからその招待状を渡されていたのだ。会員はその日、どの花の蜜を吸うか決めるのである。クロードは自分が尋常ならざる状況に追い込まれているように思った。だが、美しい花々の姿を見ていると、なぜそんなことを考えたのか忘れてしまった。

パーティーは 空中庭園 ではなく、下の階の中華料理店で催された。

チャイナドレスで着飾った「生徒」たちは総勢十数名、確かに庭園の名に恥じない千紫万紅の華やかさだった。ただし、皆ドレスの下にはストラックスをはいて足を隠していた。

会員や関係者が一堂に会したところで、誰かが天井を見上げ「あつ」と声を上げた。

「鳥が」

見ると、天井付近を一羽の小鳥が飛び回っていた。

「どこから入ったんだ」

皆しばらく、呆気にとられて飛ぶ小鳥を眺めていた。窓はどこも開いていないし、外からそんなものが入ってきたとは思えない。

やがて小鳥は、一人の紳士の肩にとまった。

「いや、驚いた。よく出来ているなあ」

手の中に小鳥を捕らえた紳士は、周囲に聞こえるように大声を上げた。

「ロボットですよ」

そう言っただけは、シーリンのほうへ歩み寄ると、小鳥を差し出した。シーリンが小鳥を受け取り、紳士に何か言っていると、二人の間にはちまち親密な空気が生まれた。

「あの人、シーリンを選ぶ」

イーレイがクロードの傍に来てささやいた。

まさかそんな、と思ったが、二人はすでにずっと以前から親しかったかのように談笑していた。紳士は中年を通り越して初老の域に差しかかっている年配である。これではまるで、本当に……

「どんなふうにつき合おうと、それは自由」

イーレイがクロードの心中を見透かしたかのように言った。

「……私を選んでください、クロード」

低い、だが熱をこめた声でイーレイは囁いた。薄化粧をし、シャパンのような金色のチャイナドレスを着たイーレイは、いつにも増して美しかった。

「ああ」

クロードはイーレイの耳に下がった、天然石のビーズが連なったピアスをまさぐりながら、うめくように言った。

何か食べましょう、とイーレイは微笑んだ。点心の類を立ったまま摘みつつ、会員が声をかけてくるのに、クロードは適当に応えていた。ここでは本当の名前や職業を明かす必要は皆無だった。

例の紳士は嘘か本当か知らないが、ベルギーでビール醸造所を営んでいると言った。彼はシーリンとイェルエルがウサギの形の心にキスの真似をさせているのを見て、可愛くてたまらないというように相好を崩していた。シーリンに入れられたのか、先ほどの口ポットの鳥が彼の胸のポケットから顔を出している。

シーリンは先日仕立て上がったチャイナドレスに、ドレスと同じ生地のスラックスを合わせ、後頭部で結った髪に簪のようなものを差し、甲の部分に飾りのついた京劇用の靴を履いていた。小柄だが華のある容姿の自分が、注目を集めていることを自覚しているのか、悪戯好きそうな緑色の瞳が輝いている。こういった手合いに振り回されることに喜びを感じる者も少なくないのだろうが、クロードはご免こうむりたかったので、紳士に半ば呆れ、半ば感心した。

パーティーは自分が主役ではないたいのそれがそうであるように、退屈だった。

それが一変したのは、料理がだいぶ減った頃に現れた男と、彼が連れている「生徒」を見た時だった。

金褐色の髪の長身の男はケルト神話の光の神のよう、対して連れだってきた生徒は、夜の闇から抜け出てきたかのような、黒髪に黒いドレスの麗人だった。

クロードは二人に目を奪われた。特に、黒衣の麗人に。

「ルイス商会のアイド・グレイです」

男はクロードのところに来ると、自己紹介と、楽しんでいるか、というような言葉を二言三言発した。彼は左目に古めかしい片眼鏡をかけていて、普通なら芝居の小道具のように滑稽に見えてしまいそうなそれが、違和感なく似合っていた。年齢は四十を越えていそうだったが、端正な容貌に老いの兆しは見られなかった。

「黒羽ハクキューです」

麗人の名前はクロードには上手く聞き取れなかった。よろしく、とだけ言って、踵を返したその人に、クロードはしばらく見とれていた。

真つ直ぐな長い黒髪と切れ長の双眸は誰よりも東洋的で、神秘的だった。ソラーヤと同じくらい背が高く、一見黒に見えた深い紫のドレスがよく似合っており、愛らしい者の多い生徒たちの中でそのたたずまいは異彩を放っていた。見た目こそ女のようにだが、生来の女があそこまで美しく在ることは不可能だろう。凄艶な美しさには、花のような可憐さより鉱物の結晶のような硬質なものを感じさせられ、そこにクロードは、植物に擬態して獲物を狙う肉食生物の緊張感に似たものを見た。

ソラーヤと話す二人をぼんやりと眺めていると、イーレイが「どうかしました？」と首を傾げた。

「いや、すごい……美男と、美人だと思って」

「グレイ伯爵はソラーヤの愛人」

てつきり、二人がカップルなのだと思ってしまうていたクロードは、目を丸くしてイーレイを見た。

「黒羽は 翡翠の乙女 の一人。乙女なんて年じゃないけど、ほら言われて黒羽の左の手首を見ると、翡翠の腕輪がはまっていた。」

「今日、旦那は来てないみたいだけど」

「旦那？」

イーレイは辺りを見渡すと、声を出さないようにしてゆっくり息だけで発音した。

マフィア、と。

九龍城は宋の時代に「官富城」と呼ばれ、塩の交易を監視するために軍隊が駐屯したのがそもその始まりだという。清代には砲台が置かれ、要塞として機能した。阿片戦争に敗北した清が英国に香港を割譲したのちも、この地域と新界は英国の管轄外となり、反清朝の秘密結社として始まった組織「三合会」が支配する無法地帯と化した。（参考文献：ジャン・モリス「香港」）

クロードはイーレイと九龍寨城公園を訪れた。一緒に来たシーリンとイエルエルは、公園に住んでいる猫を菓子でおびきよせようとしていた。散歩をしている人や、太極拳をしている人の姿がちらほら見える。のどかな風景に魔窟・九龍城の面影は微塵もない。

九龍城砦がなくなり、空港が移転してから、この街は大きく変わったのだろう。

だが、パーティーで見た麗人のことが、クロードの頭の隅にずっと引っかかっていた。

あの美しい人が、マフィアの愛人……

映画のような話だ、と思う。それが自分の身近に存在しているということに、いまいち実感が持てない。すぐ傍に、この世のものではないような「天使」がいるというのに。

今日は、イーレイたちと散歩がてら九龍塘のカフェに行くことになっていた。九龍城の最寄り駅　　というには少々遠いが　　樂富駅から九龍塘はMTRでひと駅の距離で、車ならそれほどかからなかった。

クロードは相変わらず、空中庭園　　で　　翡翠の乙女　　たちと時間を潰す日々を送っていた。

広東語はたいして上達しなかったが、麻雀は覚えた。しかし毎回のように負けて、ランチやスイーツを三人に奢るといふ形で小銭を

まき上げられていた（ソラーヤが直接金銭を賭けることを禁止していたおかげで、被害は最小限にとどまっていた）。

最近はそれにパーティーで会ったベルギー人紳士が加わることもあった。彼はアランという名で、シーリンを伴ってあちこち出歩いていた。

天使属 など連れていると、ひどく目立つのではないかと思つたが、危惧していたほどではなく、クロードたちは混沌とした香港の街に適度に溶け込んでいた。地元住民は外国人のグループだとしか思わないのだろう。イーレイたちは外に出る時はチャイナ服ではなく普通のＴシャツなどを着ていて、いくらか性別不明の雰囲気は漂うものの、ヨーロッパの学生のように見えなくもなかった。

九龍塘の駅はショッピングセンターと直結しており、クロードたちはその中のカフェでお茶を飲み、買い物をした。香港島や尖沙咀からは離れているが、九龍塘はそれなりに便利な街であった。

確かに、サウインが言ったとおり、香港での生活に何の不自由もなかった。会社のスタッフは優秀で、仕事は支障なく進行していた。自分の出る幕はなかった。

飼い殺しにされている。

クロードはようやくそのことを実感しつつあった。

こんな日々がいつまで続くのだろう。

二、三年の間だと言われてはいたが、このまま一生ロンドンに戻れないのではないか、そんな不安が頭をもたげる。その度に、なぜか黒羽の姿が脳裏に浮かんだ。

あの人に、また会いたい……

いつものようにクロードが 空中庭園 を訪れると、エントランス・ロビーのソファに、見たことのない少女が座っていた。

そう、間性しかないはずの 空中庭園 に、少女がいたのである。

「こんにちは」

真っ白な丈の長いワンピースを着た少女は、立ち上がってクロードに英語で話しかけてきた。ウェーブをかけた長い黒髪にリボンをつけた、十代の半ばくらいに見える人形のような美少女である。

人間と異なる身体的な特徴があるわけでもないのに、クロードは彼女が天使属であることに気がついた。

「あなたがクロードさん？」

「そうだけど」

クロードは相手が自分の名前を知っていることに驚いたが、彼女の顔を見ていて、あることに思い至った。

「兄から聞いたわ。私はルナサ、サウインの妹よ」

「似てると思った」

「似てる？ そう？ ねえ、八婆（ビッチ）たちに会いに行くの？」

クロードが答えるより早く、ルナサは言った。

「ここはまっとうな紳士が来るようなところじゃないわよ」

「あいにく私はまっとうな紳士じゃないんだ」

「気をつけたほうがいいわ、色々なことにね」

ルナサは手に持っていた白い蘭の花をクロードに差し出した。ロ

ビーの花瓶にあるものと同じだった。生ける際に落ちたのだろう。

あるいは彼女がむしり取ったか。

「ご忠告に感謝するよ」

クロードは花を受け取りながら、彼女がサウイン同様、少女のよくな外見より実際はやや年長であることを悟った。

奥に向かつて歩き始め、途中でちらりと後ろを振り返ると、ルナサはまだロビーに立っていた。白黒市松模様の床の上に立った彼女の後ろ姿は、チェスの駒になったアリスのように見えた。

応接室に入ると、イーレイ一人がいた。

「入り口でサウインの妹に会ったよ」

「ルナサに？ また入ってきてたんだ、あの子」

クロードが蘭を手渡すと、イーレイは卓上のライターを手に取り、花に火を点け、灰皿に落とす。ガラスの灰皿の中で、花は炎に包

まれた。

「あの子、ちょっと頭がおかしいみたいなんだ。下の階に住んでるんだけど、ソラーヤがいくら来ると言っても聞かなくて」

「頭が？」

そんなふうには見えなかったのだが。逆に、彼女だけがこの狂った世界の中、一人正気を保っているのではないか。そんな気がした。「今日は皆いないんだけど、どうします？ 私たちだけでおさらいする？」

「いや、広東語はいい」

クロードはイーレイの肩を抱き寄せた。なぜかむしろようにそうしたい気分だった。

「小蜜」に選んだものの、クロードはまだイーレイに触れたことがほとんどなかった。だから服の下の体がどうなっているのかも、ソラーヤから説明されていたものの、実際に目にはいかなかった。

イーレイはクロードの胸にもたれ、じっとしていた。口づけても抵抗しなかったが、チャイナ服のボタンを二つも外すと、手をつねられた。

「痛いじゃないか」

「もう……人が」

部屋の外から誰かが廊下を歩く足音が聞こえた。

「その布のボタンは外しやすいんだな。なるほど」

なるほど、脱がされるために着ているのか、と思う。

「昼間なのに……」

ボタンを留め直すイーレイの頬は朱を刷いている。クロードは初めて相手を可愛いと思った。今まできれいな子だとは思っていたが、愛情に似たものは感じたことがなかったのだ。

「夜ならいいのかい」

「ええ。夜なら」

「分かった。出直そう」

「お待ちしています」

イーレイは何かしら矜持の類を示しているのか、氣どつた顔を
して冷ややかな声を出した。クロードは頷き、応接室を出た。ロビー
にはもう、ルナサの姿はなかった。

夜に再び訪れたクロードを、イーレイはパーティーの時と同じチ
ヤイナドレス姿で出迎えた。自分が来るまでの間にシャワーを浴び
化粧をし、きつと中華料理は食べていない。そう思うとクロードは
イーレイの様子がずいぶん殊勝なものに感じられた。

初めて目にしたイーレイの部屋は、ホテルの一室のようだった。
応接室と同様にファブリックや調度はどれも英国風の上品なものが
使われており、絹のクッションカバーや照明器具といった小物に中
国のものが取り入れられていた。香港のファッションやインテリア
にしばしば見られる「イースト・ミーツ・ウエスト」が、ここでも
採用されているというわけだ。

そこでクロードは少しだけ酒を飲み、イーレイを抱いた。
ベッドの上でチャイナドレスのボタンを外すと、イーレイはクロ
ードに問うた。

「女性は嫌い？」

「嫌いというか、母親と同じ体の人間とやれる男の気が知れない」

「サウインと同じことを言ってる」

「そうか」

だから、サウインに親近感を覚えたのか。

「なら、あそこはあまり見ないで……大丈夫、任せて」

任せてとは言ったがイーレイは娼婦のようなテクニクを駆使す
るわけではなく、アロマセラピーの一環なのかと思うような、穏や
かな行為を丁寧に行なった。二人は時間をかけてゆっくりと抱き合
った。

初めて知ったイーレイの体は確かに男でも女でもなかった。胸に
は膨らみがなく、きゃしゃな腰にはペニスは無いがヴァギナがあっ
た。その上には、ペニスのように尿道が通っているが実は肥大した

クリトリスだという、男女どちらのものでもない器官が存在した。ほっそりとしてしなやかなその体は、全体的に少年のようだったが、未熟な印象はなく、むしろ完璧な造形に思われた。

クロードは第七天の天使がもたらす法悦を堪能した。イーレイの肌は絹のような手触りで、何かつけているのか微かにリングゴに似た甘酸っぱい香りがした。罪の果実の匂いが。

私には分かる。あなたは人間が嫌い。女とか男とかじゃなくて。

ベッドの上でそうイーレイに囁かれ、クロードはそうなのかもしれないと思った。

三十を超えた大の男が、何を言っているのかと笑われるかもしれないが、確かにクロードは他人にあまり関心を持たないたちだった。ゲイであるかのように振る舞って女を寄せ付けず、男と恋をして寝ることもあったが、いつもどこか醒めていた。自分だけが可愛いのかもしれないが、もしかすると自分にすら関心がないのかもなかった。自己愛の強い人間には閉口するが、まだ愛の持ち合わせがある。自分にはそれすらない、かもしれない。

明け方、物音で目を覚ますと、イーレイが冷蔵庫を開けて水を飲んでいた。

全裸で眠ったと思ったが、キャミソールとショーツを身につけている。それもスポーツでもする時のような、色気のないものだ。クロードは少しだけ愉快的気分になった。

「ごめんなさい、起こした？」

ベッドに戻ってきたイーレイが言った。その体を抱き寄せる。自分と同じように骨と肉を持ち、血が流れ、あたたかい。

「誰かと寝るのは久しぶりだ」

クロードは腕の中のイーレイの体温を心地よいと思いつつ、再び目を閉じた。

クロードはイーレイと二人で過ごすことが多くなった。

生徒を自宅へ連れて行くことは本来禁止されているのだが、許可が下りたので、九龍塘の家に泊めることもあった。二人はそこで、まるでごく普通の恋人同士のように過ごした。

ソファに並んでTVを見たり、お茶を飲んだり、キスをしたり。会話は常に他愛なく、中身らしきものはほとんどなかった。イーレイはよく、子どもの頃の話や人から聞いた話をしたが、クロードはいつもそれが以前に聞いたことがあるものなのか、そうでないのか区別がつかなかった。全ては夜が更け、ベッドで抱き合うまでの時間潰しでしかなかった。

イーレイと抱き合うと、クロードはいつも、十代の少年の頃のことを思い出した。その頃から自分は、女性に興味がなかった。抱きしめたいと願うのは、天使のような少年だけだった。それとも自分がそうなりたいと願っていたのか。今となっては分からないが、腕の中には夢のように美しい「天使」がいるのだった。

「ロンドンに帰りたい」

朝になるとイーレイは決まって、自分で簡単な朝食を作り、紅茶のカップを手に、そう呟いた。

「君は ラボ で育ったと言っていたな」

「そう」

イーレイの話によると、天使属は基本的に皆 ラボ と呼ばれる施設で生まれる。そこで教育を受け、多くの者はそこで就業し、老いると老人専用の施設で暮らし、死んでゆく。まさに「揺りかごから墓場まで」。そこから出たくてイーレイは香港に来たのだと言っていたが、ホームシックにかかっているというのだろうか。

「別にラボには戻りたくないけど、ロンドンで暮らしたい。この部屋がロンドンにあるんだったらいいのに」

イーレイに言われて、クロードはその様子を想像した。二人で、ロンドンで暮らす……悪くない思い付きではないだろうか。

「雪が見たいな」

切実な声でイーレイは言った。その声を聞くと、クロードは何としてもその願いを叶えてやりたいような衝動に駆られた。

肌を重ねるうちに、さすがにクロードも相手に対して情が湧いていた。温厚な性格のイーレイは、一緒にいる者を安らかな心地にした。

しかし、イーレイは確実に香港に倦んでいた。それは香港でなくともそうだったかもしれない。だが、腐る寸前にまで熟れた南国の果実のような街は、倦怠感を熟成させるのにもおあつらえ向きに見えた。確かに香港は刺激的だ。美味をむさぼり、買物に明け暮れ、競馬場で運を試す。楽しいことはいくらでもある、ただし飽きるまでの話。オーダーメイドのチャイナドレスも、めずらしいシノワズリの雑貨も中華料理も、もう胸をときめかせることはない。シーリンやイエエルはまだ見るもの聞くもの全てがめずらしいのだろうが、イーレイはすでに飽きており、クロードは飽きる以前に関心がなかった。

若いイーレイは楽天的に、ロンドンに戻りさえすれば人生が好転すると信じているようだった。自分が今いる場所より他の場所のほうが常によく見えるのは、若さの特権である。クロードもかつてはそうだったが、家を出て学校の寮に入っても、寮を出てフラットを借りて暮らしても、こうして香港にやって来ても、人生が牢獄に酷似していることは変わらなかった。だから今更そのようには考えられなかったが、一人ではなく、二人になれば何かが変わるのではないか、という思い付きは、あながち間違いではないように思われたのである。

だから、ロンドンの父への電話でこう言った。

「ルイス商会は至れり尽くせりに何でもやってくれましたよ。アパート、メイド、車のレンタルまで、何でもね。おまけに愛人まで。」

すごい美人とつき合ってますよ。女じゃないけど」

父の驚く顔を想像して話したのだが、相手は驚いているというより喜んでいような声で、そうか、と言っただけだった。もしかすると 空中庭園 のことまで承知の上だったのかもしれない。間性でもホモよりマシだということか、畜生！

「その子は僕とロンドンで暮らしたがってる」

「天使属なんだろう？」

やはり知っていたか。

「いずれ会ってほしいんです」

「分かった」

どうしてこう物分かりがいいのだろうか？ 男とつき合っていることを知った時には、この世の終わりのような顔をしていたくせに。苛立ちを覚えつつ、クロードは通話を切った。今度サウインに会ったら、父のオーダーを聞き出すつもりだった。ホモの息子をどうにかしてくれ、という項目が含まれていなかったかと。

「清代の蓋碗です。二脚で一万五千ドルから」

サウインはテーブルの上に並べた茶器の説明をすると、辺りを見渡した。客たちは椅子から乗り出すようにして、百年以上前の茶器を見つめている。白磁に蓮の花の絵柄が入ったそれは、サウインによると、粉彩と呼ばれる技法で絵付けがなされているという。

クロードはルイス商会のオークションに参加していた。空中庭園 と同じビルの中にある事務所に入るのは初めてだった。

「皆様どうぞ、近くでご覧になってください」

普通のオークションと違い、応接室のような部屋で少人数で行われているそれに、クロードは興味がなかったが、別のものに目が釘づけになっていた。

サウインの背後に助手として、あの黒羽が控えていたのである。

今日はソーラヤが着ていたような黒いスーツを着て、長い髪も後ろで束ねている。パーティーの時とは違って地味な装いだったが、

それがかえって男装の麗人のような妖しい美しさを醸し出していた。

「一万六千ドル」

「一万七千ドル」

クロードの隣にはあのアランが座っていて、興味深そうにオークシヨンの光景を眺めていた。彼はよほど羽振りがいいのか、シーリンを連れて競馬やマカオのカジノにまで行っているという。シーリンはギャンブルの才能があるらしく、彼をずいぶん儲けさせたようだ。アランはすっかりシーリンに骨抜きにされており、日本にキモノを注文したり、金魚を買ってやったりしていた（イーレイはシーリンのことを「花魁」のようだと言い、魚がいると部屋が生臭くなりそうだと顔をしかめていた）。金魚は香港や日本ではよく飼われているペットらしい。

「一万八千ドル」

「一万八千ドル　他にいらっしやいませんか」

「二万ドル！」

十名もいない参加者のうち、本気で茶器を欲しがっている者が数えるほどだったのか、その蓋碗は二万香港ドルで落札された。骨董の価値など分からないクロードはあくびを噛み殺し、サウインと黒羽の美貌を觀賞して退屈な時間をやり過ごした。

オークシヨンが終わり、客たちが帰ってしまうのを待って、クロードはサウインに声をかけた。

「お茶でも飲まないか」

サウインはなぜ？ と問うようにこちらを見た。

「君と話したくて来た。骨董に興味はない」

「それはまた、」

サウインは黒羽に目で合図を送った。黒羽は軽く頷き、部屋を出ていこうとした。

彼も、と引き止めようとして、その語が適切であるのかためらったクロードは、言葉を飲み込んだ。ソーヤはマダムと呼ばれ、生徒たちは「お嬢さん」などと呼ばれていたが、間性を「彼女」と言

うべきなのかどうか、クロードには疑問が残っていたのである。

「隣の部屋にお茶の支度をさせます。そちらに行きましょう」

サウインに促され、クロードは部屋を出た。

隣室もオークションの会場と同様に、空中庭園の応接室に似たインテリアだった。基本的にヴィクトリア朝時代の英国風だが、戦利品のようによくつか中国のものを飾ってある。ビルが十九世紀のものわけがないから、ルイス商会の意識が創業当時のままなのであろう。彼らの頭の中では祖国はまだ大英帝国なのだ。

黒羽が盆を持って入ってきた。紅茶のポットとカップを二人分、卓上に置く。翡翠の腕輪はしておらず、男物の腕時計をしているのが目に入った。

「君の分は？」

お茶に誘おうとすると、「私は仕事がありますので」と、ハスキ―な声で返された。黒羽はにこりともせずに出て行ったが、それがまたクロードの気に入った。

「気の多い人だ」

サウインは紅茶を注ぎながら、呆れた顔を見せた。

「仕事って？」

「うちのスタッフなので。空中庭園の生徒ではないんですよ」

「そうだったのか」

どつりで、普段見かけないわけだ。

「けっこう有能でしてね。語学も堪能だし、記憶力もいい。東洋人に似ているので香港では何かと都合がいいですし。イーレイから聞いていませんか」

「聞きづらくてね」

マフィア、と囁いた時のイーレイの声が耳朶によみがえった。

「もうずいぶん親密になっていると思っただのですが」

「親密だよ、おかげさまで。だから嫉妬されたくない」

「あの子はいい子でしょう」

「ああ、気立てもいいし、体もすごくいい。あれがあんなに気持ち

がいいとは、三十年以上生きてきて知らなかったよ」

クロードは紅茶を啜った。アールグレイだ。グレイ伯爵。

「父は君に何を頼んだ？ 悪癖をどうにかしろとでも？」

「あなたが淋しくないようにと」

ハツ、とクロードは鼻で笑った。

「サウイン、君は子どもがいるそうだな」

「もちろん、私も父親として子どもの幸せを第一に考えますよ」

「女は嫌いだと思ったんだが」

「女と寝なくても、子どもは作れます」

言われて、クロードは合点した。体外受精か、と。それならば直接女を妊娠させる必要はない。それにしても物好きだな。

優男の見た目に反して、サウインはずいぶん食えない男だった。

聞きたいことは色々あったが、このままでは煙に巻かれてしまうだろう。クロードは頭の中を整理しようとした。

「今日出ていたものはめずらしいものなのか」

「さつき興味はないと言ったのに」

「茶器や彫刻に興味はないが、君たちがどういいう仕事をしているのか興味があるのさ」

サウインは肩をすくめた。

「好奇心を持ちすぎると身を滅ぼしますよ」

「どこかで聞いたような台詞だな。紅茶と同じ名前の人は、君の上司か？」

「そうです。時々様子を見に来る。もうロンドンに戻りました」

「マダム……ソラーヤの愛人だと聞いたけれど」

「イーレイがそう言ったんですか？ まあ、そんなものです」

グレイ伯爵がルイス商会の中での程度のポジションにいるのか分からないが、自社ビルに愛人を住ませ娼館まがいのことをさせているのだから相当なものだろう。

見てください、とサウインはスーツのポケットから携帯電話を取り出した。小さな画面に画像が現れる。

「私のパートナーと子どもです。ブリュッセルにいる」

画面には、間性と思しき美人と、まだ十歳にもならないであろう幼い子どもの姿が映っていた。それを見てクロードは、なぜかひどく傷ついた気持ちになり、何も言えなくなった。

逃げるようにルイス商会の事務所を出ると、クロードは 空中庭園 に向かった。

エレベーターを降りると、なんと目の前にルナサがいた。彼女はエレベーターを待っていたようだったが、クロードを見ると目を丸くし、乗り込むのをやめた。

「また来たの？」

「ああ……ルイス商会のオークションに参加してた。君の兄さんは……」

ひどい奴だ、と言いたかったが、クロードは口をつぐんだ。

「ルイス商会には関わらないほうがいい。いいえ、関わっては駄目」「どうして？」

「あそこの人はひどい人ばかりよ。 그레이伯爵に会った？」

「ああ、パーティーでちらっと」

「伯爵は、サウインの子どもと結婚して、自分たちの子どもを私に産ませるつもりなのよ」

ルナサの発した言葉の意味が分からず、クロードは眉をひそめた。 그레이伯爵が、サウインの子ども（先ほどの画像の子どもか？）と結婚する？ そしてその子どもを、ルナサが産む？ あまりにも筋が通っていない。やはりこの娘は狂っているのか。

「でも、伯爵はマダムのお人なんだらう？」

「そうよ。それなのに、そんなことを考えてる」

「黒羽は」

ルナサと会話をしても無駄だ、そう思ったのに、ふいにその名が口をついた。

「黒羽？ ああ、アルカノストね。あの人の子どもも私に産ませる気よ」

アルカノスト？ 初めて聞く言葉だった。

「どういうことだ？」

問い質そうとすると、「ルナサ！」という鋭い声が飛んだ。ソーヤだった。その姿を認めると、ルナサは慌ててエレベーターのボタンを押した。下降せずその場にあったエレベーターは扉を開き、ルナサの体を飲み込んだ。逃げる彼女の左の手首に、翡翠の腕輪が見えた。

ソーヤはため息をつく、クロードに謝った。

「すみません。おかしなことを言っていたでしょう」

「あの子は、サウインの妹だそうですね」

「そうです。私が預かっているのですが、少々、その……」

ソーヤは口ごもり、クロードから視線を逸らした。

どうやら、ルナサの頭がおかしいというのは、嘘ではないようだ。そもそも、もう冬が近いというのに、あの真っ白なワンピース。確かに香港は気温が高く、昏間真夏の暑さになることもあるが、地元の間は皆秋の装いではないか。狂い咲き、という言葉が頭に浮かんだ。

「おや、顔色が悪い」

「少し気分が……」

クロードはソーヤと話したくなり、わざと気分が悪いふりをした。そうでなくとも、頭がおかしくなりそうだったのだが。

「いけませんね。医務室がありますから、そちらに」

ソーヤに伴われて、クロードは初めて医務室だという部屋に入った。驚いたことに、病院の診察室のような設備が整えられていた。そこでクロードはソーヤに体温や血圧を測られた。ソーヤはアロマセラピストだけでなく、もともと医者だという。

「どうしてプリュツセル・ラボのドクターが、こんなところに？」

「人生には、どうにもならないことがままあります。出会ってしまったが最後、逃れられないことというのが。私はアイド・グレイに出会ってしまった」

ソーヤの左手を見ると、薬指に指輪をしていた。グレイ伯爵が

贈ったのだろうか。指輪の上では、彼の瞳のような冷たいブルーの石が輝いていた。

「ルイス商会は何なんです？」

「骨董屋ですよ。私はラボに嫌気がさして、遠いところに行きたかった。以前から漢方や整体を学びたいと思っていたので、香港に行こうと思った。そしたらルイス商会の支社があつて、利害が一致したというわけです。私個人の財力では、自分一人が暮らすのがやつとで、これだけの設備を用意して、何人もの生徒を教育することなど不可能ですから」

「だから娼館まがいのことを？」

娼館、という単語を出すと、ソラーヤは苦虫を噛み潰したような顔になった。そんな顔にしても、明けの明星の名を持つ人は美しかった。実はもう三十代半ばで、クロードより年上だと聞いていたが、とてもそうは見えない若々しさだった。

「下世話な興味でなく、本当に私たち間性に興味を持ち、大切にしてくれる人を見つけるためです。ここには身元の確かな紳士しか来ない。何のつてもなしに私たちがラボの外に出るのは容易ではありません。仕事があるとだまされ、犯されて殺された者もいる」

「黒羽は何をしているんです？ ここの生徒ではないそうだけど」

「骨董の鑑定を学んでいるでしょう。私も茶器や家具が好きです」
「ルナサが意味不明のことを言っていた。伯爵は自分の子どもを彼女に産ませる気だとか、黒羽の子どもを産ませる気だとか」

「借り腹にされると思っているんです。ホストマザー。天使属は女性が少ないので、自分以外の子どもを代理出産することも多い。そのせいであの子は、周囲の人たち皆の子どもを産まなければならぬという妄想にとりつかれている」

「それはまた……」

ルナサとはラマス（収穫祭）に相当するケルトの祭りのことだという。狂える豊穡の女神、か。

クロードはルナサが少し気の毒になった。人生は牢獄だ、確かに。

けれど、あのくらい若い娘なら、まだそのことに気付いていなくてもいいだろう。

「あの子が何を言っても忘れてください。かまわないほうがいい」
潮時だと思い、クロードは礼を言って医務室を出た。イーレイの部屋に向かおうとすると、アランとシーリンがこちらにやって来た。
「これからナイトレースに行くんです」

「昼は競馬、夜はオペラ」ならぬ夜の競馬は、不夜城香港らしい娯楽のひとつだ。シーリンは華やかなチャイナドレス姿だった。肩からストールをはおり、さらに寒くなった時のために上着を手を持っている。それがクロードにははつとするほど正常な感覚に思えた。

「来週ベルギーに帰らなければならぬので、しばらく競馬もお預けですよ。ぜひまた、この子たちと麻雀をしてやってください」

アランはすっかりシーリンの保護者と化していた。彼は香港に住んでいるわけではなく、年に何回か訪れるだけだと言っていたから、留守の間よろしく、ということらしい。

適当に返事をし、目当ての部屋に辿り着くと、クロードはイーレイを抱きしめた。いや、抱きつき、すがりついたといったほうが近かった。

よろけそうになったイーレイは、ベッドの縁に腰かけた。クロードもベッドに座り、イーレイの膝に頭をもたせかけた。

「どうしたの？」

答えを求めているような声で問い、イーレイはクロードの髪を撫でてくれた。

「アランはベルギーに帰るそうさ。私もロンドンに帰りたい」

イーレイの細い指先が頬に触れる。

「アランがチョコレートをくれたんだけど、食べる？」

「いや、今はいい。しばらく何も話さないでくれ、……いや、君のことを話してくれ。ほら、小さい頃に読んだっていう、ウサギの話……」

イーレイはくすりと笑い、お伽話を始めた。

十二月に入ると、クロードの父が香港にやって来た。工場も視察したが、本当の目的はイーレイと 空中庭園 だった。

空中庭園 でチャイナドレスを着たイーレイに出迎えられると、父は不躰なまでにじつくりとその全身を眺め回した。

「いや、お美しい……失礼ですが、女性ではないというのが嘘のようですね」

クロードは父の口を塞ぎたかったが、イーレイは鷹揚に微笑んでいるだけだった。

ソラーヤも交えて、一同はお茶の席を囲んだ。

「息子からイーレイさんをパートナーにしたいという話がありましたね」

父はシノワズリの黒いスーツを着たソラーヤに向かって話した。ソラーヤはいつも男のようなスーツ姿で、パーティーでもチャイナドレスを着ているのを見たことがない。

「願ってもないことです」

「いえ、こちらこそ願ってもないことです。そうでなければ息子は一生独り身だったでしょう」

父は何のためにここを訪れたのか。確かにイーレイに会ってくれと言ったのは自分だが、こうしてソラーヤと話している意図が分からず、クロードは困惑していた。

「フォークスさんから聞いたのですが……、その、子どもも作れると」

クロードはぎょっとして父の顔を見た。だが、父は気付く様子もなく、ソラーヤを見つめている。

「二十歳の時に採卵した卵子を、ロンドン・ラボに保存しています。万一それで上手くいかなくても、新たに採卵することも可能です。なので、精子さえあれば……」

ソラーヤではなくイーレイ本人が答え、恥じらうように目を伏せると、まるでそこに胎児がいるかのように下腹部に手を当てた。

「そうなのですか」

父が、妊娠でも告げられたかのように目を見開き、身を乗り出した。

「体外受精させた受精卵を、ホストマザーの女性に妊娠・出産してもらうことになります」

ソラーヤが話し始めると、クロードは自分が大きな思い違いをしていたことによく気がついた。

代理出産には二通りある。ひとつは他人の受精卵を出産するホストマザー（借り腹）、もうひとつは出産する女性が自分の卵子を提供するサロゲートマザー（代理母）。生殖医療が日常茶飯事になった現在でも、当事者になつたことがない者には、混同している者が多い。体外受精と人工授精も同様である。体外受精は文字通り卵子と精子を体外で受精させるが、人工授精は精子を女性の体内に人の手で送り込む。

間性には卵巢があり、人工的に卵子を作らせて採卵し、それを体外受精で男性の精子と受精させ、女性に産んでもらう。

それを、クロードはてつきり、自分の精子をサロゲートマザーに受精させるのだとばかり 全く関係のない女性との子どもを作るものだとばかり 思っていたのだ。無論、そんなことはごめんだつた。

だが、イーレイは自分の卵子で子どもが作れる。なぜだか、畏にはまったような気分だった。

ルナサの姿が脳裏に浮かび、彼女は狂っていないのではないかという考えが湧き起こった。大人たちは狂っているが、あの娘は狂っていない。

「天使属ももともとは人間と同じように女性と男性が半々くらいで、間性はごくわずかだったようです。ところが、二十世紀から女性が減って間性が増えていることが分かり、間性からも採卵するように

なつたところ、間性が多数派になりました。今や、私たちは医療技術の恩恵なしには生殖出来ないと言つても過言ではありません」

「二十世紀からあることだが、生殖医療とは、すごい技術だ……必要としている人々には悪いが、私は時々恐ろしくなりますよ。人類はどこまで行くのだろうと。神の領域まで行くのだろうか」と

「生物である以上、生殖は本能的な欲求です。どこまででも求められるでしょう。精子や卵子が作れない者が作れるようになる研究、人工子宮の研究……課題は山のようにあります。昔は採卵時の副作用もひどかつたし、卵子単体での保存は出来なかつた。体外受精による受精卵の着床率も低かつた。ですが、神は偉大です。今ではそれらの問題はほぼクリア出来ました」

「人工子宮での胎児の育成が可能になれば、あなたがた間性はホストマザーなしに子どもを得られるようになるのでしょね。まるでSFだが」

「そうですね。しかし、それはなかなか難しいでしょう。技術的な問題もありますが、女性以外の性の者は女性を子宮から解放したくないのだと思います。確かに女性と母性はイコールではない、けれど母性信仰というのか、子宮信仰というのか、そういったものは我々の魂の根源に、根強くあるのではないのかと思います」

ソーラーヤと父の会話を頭の後ろで聞き流しながら、クロードはこの前ソーラーヤが言った「利害の一致」ということを考えていた。

ルイス商会は人身売買さながらにイーレイをクロードたちに売りつける。親たちは嫁と孫を得る。イーレイは香港を脱出し、クロードの家の財力で何不自由なく暮らす。なるほど、全ての者の利害は一致している。自分を除いて。

「父さん、もういいだろうか」

イーレイと二人きりになりたいと言つて、クロードは席を立つた。ソーラーヤとの会話に夢中になっていた父は、おざなりに返事をしただけだつた。

「どうということなんだ」

イーレイの部屋に入ったクロードは、なるべく怒りを露わにしないようにして問い質した。

「どういうことと言われても……お父さまに会ってほしいと言ったのはあなたなのに」

「子どものことは初耳だ。なぜ今まで黙っていたんだ」

「そんな話、まだ早いと思ったから」

「まだ？ 君は私に会う前から、私の花嫁候補だったんだらう。違うか」

イーレイは否定しなかった。

「だまされた気分だ。月経もないし、妊娠もしないのに、子どもとは……」

「だましているつもりはなかったんだ」

「私と子どもを作るなら、帰国出来る。最初から仕組まれていたんだらう」

利害の一致だ、とクロードが言うと、イーレイは首を振った。

「お互いに選ぶ権利はあった。拒む権利も。あなたは私を選んでくれた」

「そうだな。君は拒まなかった」

クロードはイーレイを抱きしめた。ゆっくり腕を回したのに、一瞬イーレイが身を固くするのが分かった。かまわず尻に手を伸ばし、撫でる。中に卵巣や膣を抱えているせいか、イーレイのそれは男のものよりふっくらとしている。

「望んで私に抱かれていた、と」

「あなたは、私と似ていると思ったから」

そうなのかもしれない。自分たちは生きること飽き、倦んでいく。

「私たちが人間の社会で生きていくのがどんなに難しいか、分かる？」

イーレイはクロードの顔を見上げた。目に涙がたまっている。

「少しは分かるつもりだ……イーレイ、泣かないでくれ、私の天使」

齒の浮くような台詞を口にしながら、クロードは相手の目尻に唇を押しあてた。

「あなたは私を奇異の目で見ない。本当に求めてくれる。だから……」

クロードはイーレイの髪を撫で、頬にキスすると、「少し父と話して来る」とドアに向かった。廊下を歩きながら、ここまで用意周到だということは、すでに自分の精子はロンドンに送られて保存されている可能性もあるかもしれないと考えた。イーレイがコンドームの中身を始末すると見せかけ、冷凍していたら……

応接室に戻ろうとすると、ちょうど父たちが出てきたところだった。クロードは父をソラーヤから引き離すようにして、無人のエントランス・ロビーに連れていった。

「まさか、香港に行けというのが、こんなことだったとは思ってもいなかった」

「お前が彼女を選んだのだろう」

父はイーレイのことを「彼」ではなく「彼女」と呼んだ。

「子どもなんて寝耳に水だ」

「今すぐ作れというわけじゃない。一年は香港にいてもらう。それからだ」

怒りでクロードが言葉を出せずにいると、父は続けた。

「女以上の美人じゃないか。会う前は、シーメールみたいなおしか想像出来なかったんだが。あのドクターも実に知的な人だ。きっと美しく賢い子が生まれるだろう」

「ルイス商会はただの骨董商じゃない。どうしてあんな連中と関わっているんだ」

そう言うと、父は、「エクス・ニヒロ」と謎の言葉を発した。

「何です、それは」

「紳士クラブのようなものだ。ルイス商会の社長やグレイ伯爵、フオークス氏も所属している」

グレイ伯爵の左手に、サウインのものと同じ指輪があったことを、

クロードは思い出した。

「……フリーメーソンのようなものですか」

「いや、そういうのともまた違う。お前もイーレイと子どもを作れば、入会出来るだろう」

クロードは父を置いて一人でエレベーターに乗り込むと、ルイス商会の事務所の階を押しした。

「サウイン・フォークスに話がある」

事務所に着くと、半ば強引に中に入り、サウインを呼び出した。

「いったい何です。あなたは仕事の邪魔ばかりする」

サウインは眉間に皺を寄せ、不機嫌な顔を作ってみせた。

「今日父が来た。いつから私はイーレイと子どもを作ることになっていたんだ？ サウイン、君は全て知っていたんだろう」

「それが何か」

「イーレイを売るような真似をして……」

「クロード、あなたは自分が恵まれすぎていることに気付いていないようだ」

サウインの声音からいつもの、どこか人をからかっているような調子が取れた。冷たく硬い声で彼は言った。

「父上の言うとおりにしていれば、あなたの幸福は約束される。いずれ本社にも戻れるし、妻も得られる、子どもだって……。何が不満だというんです？」

「……私は何も欲しくはないんだ」

「贅沢な望みだ。クロード、私は何も持っていないかった。あなたが生まれた時から当たり前前に持っていたようなものを何ひとつ、たとえば親の庇護さえも。私は自分を守るために体売り、精子を売り、そうして出来た子どもさえ売り、それでもあの男から逃れられずにその下で毎日働いた。やっと手に入れたのが、優しく美しい妻とその子ども」

「あの男」というのが、グレイ伯爵であることが、サウインの目の色を見ていたら分かった。

「イーレイはあなたに体と卵子を差し出すことで安定した生活を得られる。他に手段がなければ、それを使うのは当然のことだ」

売春を肯定するようなことを言っている、とクロードは呆れたが、サウインの瞳の奥で燃えている、怒りの炎を見てとり、それを美しいと思った。

確かに自分は何不自由なく育てられた。他人には何ひとつ不満などないように見えるだろう。それなのに自分は、常に生きる糧に飢えている。この渴望は、何も持たなかったという男のそれと、何と似ていることだろう。

その目を見つめっていると、サウインは我に返ったのか、ぽつりと言った。

「イーレイを大切にしてください」

「あとひとつだけ訊きたい。エクス・ニヒロ とは何だ？」

「無からの創造、すなわち神の御業」

それだけ言うと、サウインは、「仕事があります」とクロードに背を向けた。

ベッドの上ではイーレイが寝息を立てている。ルイス商会が用意したクロードの住居は、空中庭園 などと違って北欧家具を入れたシンプルなインテリアで、それはクロードの好みにならなっていた。イーレイの寝顔を眺め、その作り物めいた清潔な美しさが「妻」という語の生々しさからかけ離れていることに、クロードは安堵を覚えた。天使のいる眺めは、いつも自分を安らかにした。

それなのに、未来を思うと不安にさいなまれる。イーレイを妻にして子どもを得て、本当に自分の幸福は約束されるのか。そうして人生が行き着くところは、はたして天国なのか墓場なのか。

人間でもない、女でもない、間性の 天使属 をパートナーに迎えるという大いなる逸脱は、思わぬところに罨が潜み、クロードを両親が望む「妻と子がいるまっとうな男」に仕立て上げようとしている。これを裏切りと呼ばずして何と呼ぼう。

恋愛という行為は、本来はごく個人的なものだ。しかし、男女が結婚し、子どもを作るとなると、それは社会的なものに変化する。新たな社会の一員を生み出すからだ。その可能性がないという点において、同性愛はいつまでも個人的なものであり続けることが出来る。間性との恋愛が同性愛なのか異性愛なのかは判然としないが、そういった意味で限りなく同性愛に近いものだ。クロードは考えていた。それなのに、間性の卵巣は、男女の結婚のごとき幸福をもたらすというのだ。

「幸福」ということを思う時、クロードの心にはひとひらの影が差す。中華料理店の床に落ちた、鳥の形のそれのように。

父が来た日、クロードはルイス商会を出たあと 空中庭園 に戻らずにそのまま自宅に帰った。夜になるとイーレイから電話がかかってくる。怒っているかと訊かれた。「君には怒っていないが、父とルイス商会には怒っている」と答え、わずかな言葉を交わした。

けで通話を切った。後日、イーレイは、「もう会ってくれないんじゃないかと思つて、あの夜は眠れなかった」と言った。

「子どもが欲しいのか？」と訊くと、「分からない。でも、ラボのコンピュータが選んだ精子と受精させられるより、自分で選んだ人との子どもを作りたい」と言う。

「あなたと子どもを育てられるなら、自由に色んなことをさせてやりたい。自分が子どもの頃、大人になったら何になりたいか、色々考えた。でも、ほとんど無理だった。能力の問題は別にして、人間の世界に入っていけないんだつて、分かったんだ。私たちは人間と同じ土俵に立てない。特に間性は……。だつて、人間は何でも男か女のどちらかに分けるから」

クロードはサイドテーブルに置かれたペンダントを手に取った。イーレイがつけていたもので、長い革ひもの先に真鍮の十字架がついている安物だ。神を信じているのかと問うと、そういうわけではないらしい。キリスト教徒ではない東洋人でも、ファッションで十字架を身につけることはよくある。

神は偉大、とクロードはソラーヤの言った言葉を思い返した。神の御業というサウインの言葉も。女ではないイーレイが「母」になる、確かにその技術は神の御業に等しい。

イーレイは自分と結婚してロンドンに戻れば人生が変わると無邪気に信じている、たぶん。クロードも一瞬そう信じかけた。しかし、今ではそんな生活はとても想像出来ない。信じるのは苦手だ。どんなことでも、どんなものでも。現に、自分の親すら信じられない。ふと、二十代の頃、年下の男と一緒に暮らしたことを思い出した。幼稚でわがままな上にクロードの経済力を当てにしている娼婦のような男で、長くは続かなかつた。思い返してもつくづくつまらない男だつたと思う。けれど明快だつた。金以外に何も信じず、寄生虫のように他者に依存し、それなのに支配者の顔をしたがる、明快なクズだつた。踏みにじるのにためらいを持たずに済むほどの。

昼間、イーレイと買物に出かけ、何か欲しいものはないかと訊

いたが、イーレイは何もないと言って高級ブランドショップの数々を素通りした。二人は日用品だけを買って帰宅した。イーレイの気持ちはクロードにはよく分かった。だが、愛人の顔をして高価なものをねだる、娼婦の芝居をしてほしかった。これは利害の一致なのだ、金さえ持っていれば誰でもいいのだと、悪党の声で言っただけだった。そうすれば、自分は心が痛まずに済むだろう。

「私たちはラボの寮で育つから、何でも人と共有してた。自分だけの、素敵な何か欲しい。子どもの頃は、そんなふう思ったこともあるけど、そのうちそんなものがあるのかどうか分からなくなつて、どうでもよくなつた。私たちは何も所有しない。子どもだって、個人で持つものじゃなくて、皆の子だから。でも、クロード、あなたと子どもを作ったら、それは私とあなただけの子どもになるね」

イーレイはそう言った。だが、自分は、妻も子も欲しくはないのだった。

所有しないということは、所有されないということでもある。誰のものにもなりたくなかった。

クロードは稼働するラインをガラス越しに見つめていた。機械と人がサプリメントを作り、容器に詰めていく。最近、よく現場に顔を出すようになった。機械的にモノが作られていく過程を眺めていると、自分が置かれている特異な状況を忘れることが出来、心が落ち着く気がするのだ。

それでも、空中庭園には相変わらず足を運んでいた。帰りに車を頼まず、時間をかけて樂富駅まで歩くと、地元住民の生活が垣間見えた。駅の周辺は住宅地で、巨大な集合住宅が立ち並んでいる。学校などもあり、子どもの手を引いた母親がスーパーマーケットに買い物に行くような光景が見られる。住宅地としては九龍塘のほうが高級だが、住民の生活自体はさほど変わらない。男と女が結ばれて家庭を持ち、働いて日々の糧を得るといふ点で。

そうした光景が、クロードには奇妙なものに感じられた。女がない 空中庭園 から出てきたせいなのか、それともずっと前から自分はそうしたものに違和感を覚えていたのか、分からなかったが 職場のスタッフともよく話すようになった。それは常軌を逸した 天使たちの世界から、自分を人間の世界に連れ戻そうという無駄な あがきだったのか、それとも管理職としてごく当たり前の態度をと るうという意思の表れなのか、それも自分では分からなかった。

その日の夜、クロードは部下を誘ってホテルのバーに赴いた。バ ーの窓からは百万ドルと称えられる香港の夜景が一望出来た。

「どこもかしこもすっかりクリスマス一色だな。香港人はクリスチ ャンじゃあるまいに」

カクテルを啜り、クロードがそう漏らすと、同じ英国人である部 下は、「日本なんかも、こんなものです。東洋人は頓着しないので しょう」と言った。

彼と世間話をしつつ、飲んでいると、クロードの視界に思わぬ人 物が飛び込んできた。

長い黒髪の、黒衣の麗人。

黒羽だ。

「すまない、知人を見つけた」

席を外し、クロードは黒羽に近付いた。オークションの日と同じ 黒いスーツ姿で、連れはおらず、一人のようだ。

「アルカノスト！」

あまり大声を出さないようにしつつ、クロードは鋭くその名を呼 んだ。命中した、という手応えを感じた。

黒羽は後ろから撃たれたようにはっとクロードを振り返った。

「あなたは……」

「一人かい？ それとも待ち合わせを？」

「一人です」

「なら、私に奢らせてくれ」

クロードは強引に黒羽と並んで座った。バーテンに酒を注文すると、黒羽は怪しむような目つきでクロードを見た。色鮮やかな液体が注がれたグラスが目の前に並び、二人は乾杯した。よく見ると、黒羽の耳たぶには、小さな翡翠のピアスがあった。

「私の本名をご存じでしたか」

「ルナサに聞いた。今日は商談か何かで？」

「お客さまに品物を届けた帰りです」

「どうして普段中国人のような名前を？」

「冗談でつけたあだ名ですよ。私の名前は呼びにくいですから。『黒羽』というのは大昔の人に多いんです。関羽とか項羽とか、聞いたことがありませんか？ 誰も黒羽が私の本当の名前だなんて思いませんよ」

クロードは手帳を出してアルカノストの綴りを書かせた。ペンを返し、黒羽は「どうしてこんなことを知りたいんです」と眉をひそめた。顔立ちは似ていないのに、その表情はサウインに似ていた。整った横顔は女性以上に美しいが、甘さの欠片もない。それがイーレイの蜜に絡めとられた自分には、ある種の救いのように見えた。

「君に興味がある」

「サウインの言うとおり、呆れた人だ。あなたにはイーレイがいるでしょう」

「ああ、だが……」

「サウインはあなたが贅沢過ぎると言っていました。私もそう思います。人間は贅沢過ぎる」

「なぜそう思う」

「私たちの多くはラボのコンピュータに配偶子の組み合わせを決められて生まれてきます。そこに意味や理由はない。あなたの会社でサプリメントを作っているのと同じくらいに。逆に言うとそれくらいの意味と理由はある。それで十分です。理由が何であろうと、私たちという種はもう存在しているのですから。けれど人間は個々の者が自分の存在意義について悩む」

「イーレイは、自分で選んだ相手と子どもを作りたいと言っていた」
「選ばれたくないとでも？ 臆病な人ですね」

挑発的ともいえる相手の態度に、クロードは楽しくなってきた。
同じ間性であるイーレイの体から、黒羽の裸を想像してみて、体の
芯が熱くなるのを覚えた。

「臆病か…… そうかもしれない」

黒羽の手を見ると、両方とも指輪の類はいつさいなかった。クロ
ードはその左手に指先でそつと触れた。

「骨董屋は指輪が必要なんじゃないのかい」

「私は買い付けをしていないので」

エクス・ニヒロ がフリーメーソンのような組織なら、入会資格
は成人男性のみで、間性である黒羽はメンバーにはなれないのだろ
う。

「パートナーにもらったりしたものは？ 君の旦那は黒社会（マフ
イア）の男だと聞いたが」

「…… あまり私に関わらないほうがいいですよ」

黒羽が腰を上げかけたので、クロードはしくじったと思い、とっ
さにその腕をつかんだ。

「もう一杯。もう一杯つき合ってくれ」

黒羽はいまいましてに鼻を鳴らすと、バーテンにカクテルを注文
した。

「イーレイはお喋りが過ぎるようですね。でも、あの子は可愛い。
そうでしょう？」

ああ、とクロードは首肯する。

「不思議なもので、時々、ああいう子を抱きたくてたまらなくなる。
ソーヤーか誰かから聞いていますか？ 私たち間性には、体内に卵
巣だけでなく、精巣がある」

クロードがぎょつとして黒羽の顔を見ると、その顔は愉快そうに
笑みを浮かべていた。

「女性ならば左右にひとつずつ卵巣があるところを、私たちは片方

だけで、もう片方には精巣があるのですよ。もちろん、機能はしていません。それなのに、男のような気持ちになることがある」

顔は大理石の彫刻のように、触れたら冷たいのではないかと思うほどに美しいが、この麗人は、体内に猛々しい雄の獣を飼っている。クロードはそう思った。

「もし、その精巣を取り出して、精子を作らせることが出来るようになって、人工子宮で胎児が育成出来るようになれば、男も女もいなくなる。この地上が、閻性だけの 天使だけの楽園になる。そうになったらいいのにと、思うことがあります。……あなたのような人間を見ていると」

「 空中庭園 の可愛こちゃんたちとは、君はずいぶん毛色が違うようだな。君となら三人でベッドインしてもかまわないが」
「ごめんこうむりますね」

黒羽は酒を飲み干すと、「唔該」と広東語でカウンターに声をかけ、クロードが払う旨を伝えて先に席を立った。勘定を済ませると、クロードは慌ててバーを出た。

入店時に預けていたのか、黒羽はさっきまで持っていなかった鞆を抱え、エレベーターを待っていた。一緒に乗り込んだが、向こうはもうクロードとは言葉を交わす気はないようだった。

箱の中に二人きりだったので、クロードはよろけたふりをして壁に片手をつき、隅に立っていた黒羽を追い詰めるようにしてその唇に口づけた。

刹那、鈍い痛みが股間を襲った。膝で蹴り上げられたのだ。

「 抵死（ざまあみろ）！」

言葉が出ず、魚のように口をぱくぱくさせて荒い息を吐いていると、あざけるような広東語が投げつけられた。

「 すまない、酔ったようだ」

クロードは何とか体面を取り繕って言った。

「……手に入れたものを大事にしないで、手に入らないものばかり見ている人は、不幸だと思いますね」

黒羽はどこか憐れむような声音で言い、微かにため息をついた。
「お坊ちやま、あなたは幸せなんです。なぜそれが分からないんですか」

「私は……、」

エレベーターが止まり、ホテルの宿泊客が乗り込んできた。二人は何事もなかったかのような顔をして、黙っていた。

地上に着くと、黒羽は足早に建物の外に出た。追うようにして「送ろう」と言うと、「けっこうです」とびしゃりと返された。ぼやぼやしていると、黒羽の姿は街の雑踏の中に消えていた。

アルカノストとは、シーリンと同じくスラブ人が信仰する、天国にいる女性の頭を持つ鳥の名である。その姿とシーリンの名が示すとおり、ギリシアのセイレーンに由来する。シーリンは美と生のシンボルであり、対になっているアルカノストは死のシンボル。死を迎える人間に歓喜をもたらすという彼らは、一種の死の天使といえるかもしれない。

帰宅して「アルカノスト」の意味を調べたクロードは、実に黒羽に似つかわしい名前だと思った。あの黒い鳥は簡単に人の手に乗ったりしない猛禽類だ。手なずけるのに命を賭けねばならない。

出来るものなら、雄の部分を解き放つた彼を征服してみたい。

数秒触れ合っただけの唇を撫でながら、クロードは強い欲望を覚えていた。

翌日、空中庭園 に向かうと、エレベーターでひと組の親子と乗り合わせた。ウェーブのかかった褐色の長い髪をした「母親」に、クロードは見覚えがあった。

親子はルイス商会の入っている階で降りた。クロードは躊躇したが、いったん閉まった扉を開けて、二人のあとを追った。

「パパ！」

歓声を上げて子どもが飛び付いたのは、やはりサウインだった。

美しい母親は、以前写真を見せられたサウインのパートナーだ。子どもを連れてきているせいか、女性でないのが嘘のようだった。母親がクロードに気付き、怪訝な顔をしてサウインに何か言った。

サウインはこちらに向かってくると、「今日は休みですけど、何か御用でしょうか」と慇懃な態度を見せた。昨夜の黒羽とのかつことを知っているのだろうか、クロードはいぶかった。

「いや、エレベーターで一緒になって、見覚えがあったから……」

子どもがサウインの後ろに半ば隠れるようにして、恥ずかしそうに、且つめずらしそうにクロードを見上げている。

「ああ……私の子どものラッシュです。あちらはメヘル」

こんにちは、と子どもが英語であいさつした。まさに天使のごとき愛らしさだが、男の子か女の子か分からない。間性に違いなかった。

「今日、こちらに着いたんです。香港はあたたかいですね」

メヘルと呼ばれた美人はそう言ってクロードに微笑んだ。そうです、と同意しつつ、クロードはひどく居心地の悪い思いを味わっていた。子どもがパンダを見に行くと言ってはしゃいでいるのを、パンダは明日、となだめるようにしながら、サウインはその手を取った。

「私たちはランチに行くので、御用がないならこれで」

サウインたちは下りのエレベーターに乗り込んで去っていった。

取り残されたクロードは、空中庭園 に向かうために上りのエレベーターに乗った。

エントランス・ロビーを抜けると、廊下に見覚えのある二人を見つけた。一人はイーレイ、一人は黒羽だった。黒羽は長い髪を束ね、シャツにスラックスというラフな服装をしている。オフの日の黒羽を見るのはそう言えば初めてで、昨夜会ったばかりなのに、初めて見るような気がしてクロードはその姿に見とれた。

二人は何か話していたようだったが、イーレイがこちらに気付いたららしく、黒羽も視線の先にいるクロードに気付いたようだった。

すると、黒羽はいきなりイーレイの顎をとらえて、その唇にキスをした。

呆然としているクロードの横を、黒羽は無言で通り過ぎていった。これでおあいごとということなのだろうか。意外と子どもじみているのだな、と思った。

「どうしたんだろう、急に……」

イーレイはクロードの顔を見ると、口元を手で押さえ、うつむい

た。

「仲がよさそうじゃないか」

昨夜の黒羽の言葉をクロードは思い出した。もしかして、昨夜、黒羽は本当にイーレイを抱いたのではないだろうか？ 部屋でイーレイを裸にして、その痕跡がないか調べようかとクロードは考えた。「あんなことする仲じゃないんだけど」

イーレイは仏頂面になった。危惧するようなことはなさそうである。だが、黒羽がイーレイに何を言ったか。

「昨日の夜、尖沙咀のバーで黒羽に会ったよ」

「黒羽から聞いた」

「いい店だった。よかったら今度、一緒に行こう。夜景がよく見える」

機嫌をとるように言ったが、イーレイは浮かない顔で頷いただけだった。

二人で昼食をとり、お茶を飲み、夕食をとり、抱き合い、眠る。

何度もイーレイと繰り返し返した時間を繰り返し、夜が明けた。

黒羽はクロードのことを幸せだと言った。はたしてそうだろうか？

サウインとその家族の姿が脳裏によみがえった。クロードは彼に聞いたかった。

サウイン、君は幸せなのか？ と。

空中庭園 から出ようとすると、エレベーターの前にルナサがいた。

まるでクロードを待ちかまえていたかのように。

「あなたは馬鹿だね。せつかく忠告してあげたのに」

「ああ、私は馬鹿だよ。まんまと罠にはまった」

「あなたとイーレイの子どもなんて、絶対に産んでやらないからルナサはクロードを通すまいとしているかのように仁王立ちになっていた。

「……間性は卑怯だね。赤ん坊のための乳房も子宮もないのに、男

みたいに女に妊娠させて、それでも母親だなんて」

「卑怯？」

「私は、子宮のために生きてるんじゃない」

怒りをこめた声で言うルナサの目を、クロードは覗き込んだ。

「いいよ。産まなくていい。私のだけじゃない。君は、他人の子どもなんて産まなくていいんだ」

「……本当？」

「本当だとも。欲しくなった時に、自分の子どもだけ産めばいい」

「そんな自由は許されないわ」

「許されるさ。皆、自由に生きていいんだ」

ルナサは長い睫毛を瞬き、泣き出しそうな顔になった。クロードは今日の彼女が全身白ではなく、ピンク色の服を着ていることに改めて気がついた。

「好きな服を着て、どこにでも行って、誰かに出会って、恋をすればいい。君は自由だ」

エレベーターに乗り込むクロードの耳に、無理よ、とつぶやくルナサの声が届いた。

どこにいたらいいのか分からない。誰といたらいいのか分からない。いや、どこにしようかと、誰としようかと、自由だ。

それなのに、どうしていいか分からないまま、一人でさまよっている。一人でいたい？ そうなのかもしれないし、そうでないのかもしれない。

ふと、ピアノの音色が耳朶に触れ、足を止めた。そのまましばらく旋律を追い、それが知っている曲であることに気付くと、音のする方向へ、歩き出した。

一人の少年が、ピアノに向かっていた。

その真剣な横顔を見た時、クロードは生まれて初めて恋をした。十数年も昔の話だ。

それから、誰かに恋をしたのは、三十年以上生きてきて、数えるほど。筋肉質な男の肉体に欲情するのは不可能だし、元より女に興味はない。自分をゲイに括れてしまったらいつそ楽なのにと思いつながら、彼らに囲まれると違和感ばかりが募るのだ。

孤独だった。ひどく。

ずっと、誰かを欲していた、はずだった。

今なら何だっけ手に入るはずなのに、何が欲しいのか分からない。何かが欲しいのかどうかすら、分からない。

心に影が差す。その影は黒く、鳥の形をしている。

クロードは 空中庭園 のクリスマスパーティーにいた。空中庭園 は何やかんやと理由をつけて、ひと月かふた月に一度はパーティーを催していた。そうしたパーティーで新規会員が自分の小蜜（愛人）を選ぶわけだが、入会者がそんなに増えるわけもないので、ただ自分たちが飲み食いして騒ぎたいだけなのかもしれない。

非常に美味なベルギー料理やケーキを前に、生徒たちは上機嫌だ

つたが、クロードは上の空だった。

なぜなら、ルイス商会の連中に混じって、マフィアだという黒羽ハクユウのパートナーが来ていたからだ。

その男は三十代と見え、知的な容貌をしており、クロードが思い描いていたそういう世界の人間の像とはいささか趣きが異なっていた。

黒羽は真つ黒なチャイナドレスを着て、唇や爪に色を載せ、美女のたたずまいを見せて男に寄り添っていた。その姿を見てクロードは、彼の美しい仮面をはぎ取り、獣の本性をむき出しにさせてやりたいと思った。

食事をしていると突如、イーレイが小さく悲鳴を上げた。

「どうした？」

「腕輪が……」

床の上を見ると、翡翠の腕輪が真つ二つに割れて落ちていた。イーレイはそれを屈み込んで拾い、訝しげに割れた断面を見た。

「本物の翡翠かどうか怪しい安物だったんだろう？ 今度、もっと似合うものを買ってあげよう」

そう言ってもイーレイは、子どものように残念そうな顔をして割れた腕輪を見つめている。

「腕輪、割れちゃったんだ」

シーリンが寄ってきて、目を丸くした。

「翡翠って魔除けの石で、身代わりになることがあるんだってね」

「身代わり？」

「馬鹿馬鹿しい」

クロードはシーリンの言ったことに呆れた。イーレイは怪我でもしたかのように手首をさすっている。その手を取ったが、傷ひとつない。

「痛むのか」

「平気だけど……」

シーリンがじっと一点を見ているので、視線の先を追うと、そこ

には黒羽のパートナーのあの男がいた。

ふと、疑念が浮かんだ。あの男は、自分のことを知っているのだろうか？

そう考えた途端、心臓が冷たくなるような心地がした。黒羽は言ったはずだ。あまり自分に関わらないほうがいいと。

「クロード？」

「少し、気分が悪い」

クロードはイーレイと部屋に下がった。だが、そうしたら、かえって黒羽のことが気になってたまらなくなった。

出会ってしまったら、逃れられない。

その相手は、自分にとってイーレイではなく、黒羽なのだ、クロードは悟った。

関わるべきではないと思ったにもかかわらず、黒羽のことが頭から離れなかった。あの男が黒羽を抱いているのかと思ったら、嫉妬を覚えた。

イーレイといると安らぎを感じるのに、クロードが欲してやまないのは、不安を感じさせる黒羽のほうなのだ。それも、欲しているといってもそれは、手に入れたいではなく、むしろ壊してしまいたいような凶暴な衝動だった。

「イーレイ、私を愛しているか？」

お茶のカップを差し出したイーレイに、クロードは訊いた。

「本当はまだ、よく分からない。夫婦なんてぴんとこないし、正直ちよつと不安なんだ。……でも、あなたといえるのは好きだな」

あれだけ何度も抱き合ってきたのが嘘のように、イーレイは初々しい表情で素直に答えた。クロードはその答えに満足して言った。

「私もだよ」

「ブレスレットでも何でも、プレゼントすれば喜びますよ。女じゃなくたって、美しいものが嫌いな者は滅多にいないでしょう？ 何も欲しくないなんて言うのは、遠慮しているだけです。イーレイは私と違ってずっとラボで育ってますからね。人に物をねだるようなことに慣れていないだけなんです」

後日、クロードは 空中庭園 に行く前にルイス商会のサウインを訪ね、腕輪が割れた話をし、イーレイに贈る物を相談した。

結婚や子作りなど望んではいけないのにイーレイとの関係を続行することに迷いはあったが、もはや自分がどうするべきなのかクロードにはまるで分からなかった。

だが、そのことより、今はサウインのひと言がクロードの興味をひいた。

「君と違って？ 君もラボで育ったんじゃないのか」

「途中までは。十歳かそこらでラボを出ました。一時期母親と暮らしていましたが、何も出来ない人でね。それで伯爵に拾われて、彼が親代わりになってくれた。もつとも、まともな父親なら絶対にやらないようなことを色々やってくれましたがね。でもそのおかげで私は一度も飢えることも金に困ることもなく大人になれました。感謝してますよ、それなりにね」

クロードの脳裏に、たった一度だけ会ったグレイ伯爵と、サウインのパートナーの姿が浮かんだ。

「きれいな人だったな、君の奥さんは……今は幸せなのか」

「幸せですよ」

サウインは断言した。そして彼は、すさんでいた自分に、人のぬくもりを教えてくれたのはあの人だったと恥ずかしげもなく語った。母親から受けた虐待、グレイ伯爵との異常な関係、サウインの体験はクロードにとって驚くべきものだった。

「私は女が嫌いだった。母がろくでもない女でしたからね。だからといって男に掘られるのもごめんできてね。間性という選択肢に気付いた時、彼らが自分を救済してくれる本物の天使に見えました。クロード、あなたも私と同類のはずだ。あなたはゲイを装っているし多少その気はあるんでしようが、本当はそこまで男が好きじゃない。性癖がはつきりしない人が多い」

「イーレイは、昔好きだった同じ学校の生徒に少し似ている気がしたんだ。美少年が男にならずに、そのまま大人になったらあんな感じなんじゃないかと思った」

サウインの顔に初めて共感めいた気配が浮かんだ。だがクロードは、彼と共有出来るものが実はほんの僅かであることに気付いてしまっていた。彼にとつての恩恵は、自分にとつてはそうではなかったからだ。

サウインもイーレイも、ある部分は自分と似ていた。似ていると思っていた。ところが彼らは、根本的な部分で何かが違っていた。それは信仰の違いのようなものだった。

クロードはもうサウインと何を話せばいいのか分からなかった。私はイーレイと幸せになれると思うか？

そう、訊いてみたい気もしたが、何も得られないように思われた。サウインはもう帰ると言つて、クロードを残して部屋を出た。クロードは出されたお茶の残りを飲み干し、立ち上がった。

ドアを開けると年末の事務所は、皆帰国してしまったのか、人がなく、ひっそりとしていた。

残っていたのはサウインだけだったのだろうか、クロードはいぶかった。しかしまさか、部外者である自分を置いて帰ったりはしないだろう。

クロードは妙に気になって他の部屋を覗いてみた。誰かいるに決まっていると思ひながら馬鹿な真似をしているのは、黒羽ハクキューに会いたいからにほかならなかった。

「何をしているんです」

無人の部屋に勝手に入り込むと、背後から声をかけられ、クロードは本気で驚いた。振り返ると、黒羽がいつものスーツ姿で立っていた。

「……あなたですか。泥棒かと思いましたよ」

黒羽は腕組みをして、うさん臭いものでも見るような目でこちらを見た。

「サウインと話をしていたんだ」

「サウインは帰ったと思いましたが」

「お茶を飲んでいたんだ。悪いけど、片付けておいてくれ」

「分かりました。どうぞ、お帰りください」

「君に会いたかった」

「私はあなたに用はありません」

「パーティーの時の君はきれいだったな。でも、女装よりその格好のほうがいい」

クロードは相手を挑発するように、わざとその全身をじっくりと眺めた。黒羽は呆れたようにため息をつき、眉根を寄せた。

「気の毒に。あなたというといーレイは不幸になるだろうな」

「そうだろうな。私はあの子を幸せにすることは出来ないだろう」

確かに、あの子は素直でいい子だよ。一緒にいると落ち着く。なのに私が惹かれているのは君なんだ、アルカノスト」

その足をその場に縫い止めようとするかのように、クロードは声に力を入れて黒羽を本名で呼んだ。名前はその者を支配する呪文だ。黒羽の顔に微かに驚きがはしり、その色が変わった。

「ようやく自分が香港に来た理由が分かったよ。アルカノスト、君に出会うためだ」

「何を、馬鹿な」

「君を見て私は自分が求めていたものがやっと分かった。私はずっと探していたんだ……死神を」

考えなくとも言葉は次々に口をついた。熱に浮かされたようにク

ロードは黒羽に語りかけた。

「君が言うように生まれてくることには意味も理由もない。生物が本能に従った結果だ、それは人間とて例外ではない、なのに生きなければならぬ。まったく悲劇じゃないか。人間は交尾したあとメスにむさぼり食われる昆虫ではないのだから」

「あなたは人生に退屈しているだけだ」

「そうだ。私は退屈している、もうずっと」

歩み寄ると、黒羽は後ずさった。

「贅沢すぎると君は言うだろう。だが、何も欲しくないなんて、何も持たないより貧しいとは思わないか」

「そうですね。あなたは憐れな人だ。何ひとつ信じられないのだから」

「君はあの男を愛しているのか？」

クロードは黒羽の腕をつかんだ。黒羽は答えなかった。代わりに離してくれと言ったが、クロードは逆にその手に力を入れ、相手の体を抱きしめた。

「生きるためなら、何を売ってもかまわないと？」

「私は何も売っていない」

クロードの腕の中で、黒羽は喘ぐように言った。

「……あなたは、生きたいと思わないのか？ 私は生きたい。人と同じように。誰でも当たり前前持っているものを、自分も欲しい」

「君がうらやましいよ。君は幸せになりたいのだな。私はそんなものは信じられない」

クロードは一旦腕をほどくと、黒羽を突き飛ばし、尻もちをつかせた。すかさず相手の体を床に倒し、その上に覆い被さるようにすると、黒羽はこちらを殴ろうとした。だが、その拳は上手く当たらなかった。

「何を、」

黒羽は暴れようとしたが、体格的にはこちらが有利だった。クロードは左手で黒羽の右腕を押さえ込むと、右手でその顔に触れた。

「私を蹂躪し、喰らい尽くしてくれ」

黒羽は目をむいた。何を言われたのか分からないというように。

「君は私のような人間を憎んでいるのだろうか？」

「憎んでいるわけでは……むしろ、憐れだよ」

「なら、憐れんでくれ、愚かな人間を」

黒羽の顔に感情の読み取れない、複雑な表情が浮かんだ。怒り、憐れみ、慈しみ、それらのどれでもなくどれでもあるような。

「……私たちは男にも女にも属せない。それでもラボにいるうちはいい。間性のほうが多いので、それが当たり前だと思って育つんです。でも、外に出ると男と女でいっばいで、そうではない人なんていないかのように見える。本当は存在しているのに」

「ああ」

「受け入れてくれる人を探るか、自分たちだけで充足するか。私は出会って見たかった、自分を求めてくれる人に。その人のために生きてみたかった。あなたはそうは思わないんですか……イーレイを愛していないと？」

「分からないんだ、残念ながら」

クロードは黒羽に口づけた。黒羽は抵抗しなかった。

「……救いようのない人だ、あなたは」

「そうだな。私はきつと天国には行けないだろう」

私のために祈ってくれと、クロードは心の中でつぶやいた。それから黒羽の服のボタンを外してゆき、あらわになった首筋に唇をつけた。

その時間はひどく長く感じられ、ひどく現実感がなかった。

半ば強引に黒羽を抱いている間、クロードは今までに肌を重ねた全ての相手のことを思い出していた。

そして、その中に一人でも愛した相手はいたろうかと考えた。だが、どう考えても分からなかった。そもそも今まで生きてきて分かったことなど、何ひとつなかった。

「出て行ってください、すぐに」

黒羽は果てたクロードを自分の上からどかせると、苦しげな声で言った。

クロードは何か身づくろいを整えると、蹠踉とした足取りで部屋を出た。電話でもかけているのか、背後で黒羽が広東語で喋る声が聞こえた。

エレベーターの前まで来ると、クロードはうずくまり、しばらく動くことが出来なかった。足が痺れたようになり、悪寒がしていた。ようやく立ち上がり、ボタンを押した時には、自分が何をしにここに来たのかすっかり忘れていた。

エレベーターに乗り込むと、空中庭園 には向かわずに、クロードは下に下りるボタンを押した。

地上に辿り着くと、クロードは家へ帰ろうと思ってビルを出た。

少し歩いたところで、衝撃を感じ、前のめりに倒れた。

撃たれたのだ、と思った。

視界に、天使の翼から抜け落ちた羽毛のような、白いものがひとひら舞い降りるのが映った。クロードはそれを雪だと思った。

ふと、イーレイが雪を見たいと言っていたことを思い出した。

このあたたかい香港に、雪。まるで、奇跡だ。

神は偉大、神は……

幸せなのか、とその男から訊かれた時、サウインはためらいもなく幸せだ、と答えた。

飢えることも金に困ることもなく、愛する妻と子もいるのだから、これ以上何を望むというのだろう。今の生活を手に入れるために払った代償は決して安いものではない。そう、その代価は高くついたので、魂と同じくらいに

サウインは酒を飲み干すと、グラスをベッドサイドのテーブルに置いた。普段は寢酒など口にしないのだが、今夜は一人の寢室が妙に寒々しく感じられ、飲みたい気分になっていた。テーブルの上から携帯端末を取り、操作すると、画面に我が子の姿が現れた。

『パパ、また会おうね』

映像になった子どもが手を振る。それを見て目を細めると、サウインはある男に語ったことを反芻した。

魂を売った、二人の男の物語を……

*

サウインは十歳になるまで母親の顔を知らなかった。だが、ラボで育つ天使属の子どもたちにとって、それは当たり前のことだった。

なぜなら、天使属の子どもの多くは、成人から採取された卵子と精子をコンピュータが選出した組み合わせで体外受精することによって生まれてくるからだ。成人たちは配偶子を採取しても人間のようには個人で子どもを持つという概念を持たず、子どもたちは皆の子ということでは個々の親ではなくラボ内の施設で育てられた。

ただ、サウインはその中であって、めずらしく母親が自分の卵子で妊娠して産んだ子どもだった。母親が自分で息子を育てず、ラボ

に任せていたので知らなかったのだが。

そのまま、知らずに成長したほうが、その後の人生の平穩を考えると、よかったのかもしれない。

だが、母親は、ある日突然目の前に現れた。

「初めまして、サウイン。私はベルティナ。あなたのお母さんよ。

お母さんって、分かる？」

「分かるよ。卵子の人でしょう」

「そう。卵子の人だし、お腹の中であなたを育てて、産んだのも私」
サウインはとても驚いた。自分にそんな人がいると、考えたことすらなかったのだ。

母だと名乗る女性を、サウインはまじまじと見た。ブルネットの美人で、優しそうな微笑を浮かべている。

「ね、お茶を飲みに行きましょう。ケーキ、食べたくない？」

「母」はサウインをカフエに誘った。サウインは寮のスタッフを振り返った。彼らのほうが自分にとってよっぽど親に近かったからだ。間性のスタッフは、にこりと笑って頷き、ゆっくりしておいで、と二人を送り出した。母はサウインの手を取って歩き出した。やわらかくあたたかい手だった。

お母さん。お母さん。

その夜、サウインはベッドに入ると、母の匂いや声、手の感触を頭の中で何度も反芻した。急に現れた母を、サウインはもうすっかり好きになっていた。次に会える日が楽しみだった。彼女はまた会いに来る、と約束してくれたのだ。今度は、何を話そう。そんなことを考えているうちに、眠りについた。

母は約束どおり、毎週サウインに会いに来た。一ヶ月ほどたった頃、一緒に暮らさないかと言い出した。ラボにはその手続きのために通っていたのだという。

「お母さんと二人で暮らせるの？」

「そうよ。嫌？ ラボのほうがいい？」

「うっん。お母さんのところに行くよ」

サウインに断る理由はなかった。

そうして、母との暮らしが始まった。

「父」はいなかった。子どものいる女性はラボから十分な援助を受けられるため、たとえ無職でも、子どもの父親をパートナーにして自分と子どもを養わせる必要がないからだった。母は働いていなかったが、生活費はあった。

二人で暮らし始めた最初の頃は、母はままごとでもするようにサウインの世話をし、色々なものを買って与えたり、子どもが喜びそうなさまざまなところへ連れて行ったりした。

だが、楽しかったのは、短い間だった。

次第に母は、出かけることや、家事を億劫がるようになっていった。彼女は妊娠していた。

気が付いたらサウインは、自分のことは自分でやらなければならなくなっていた。

冷凍食品をレンジであたためたり、洗濯機のスイッチを押したりするのも遊びの一種のようで面白かったが、如せん子どもが自分で出来ることには限りがある。そうになると、母が何もしないのが恨めしかった。

「お母さん、お腹空いた」そう言っただけで叩かれ、「それくらい自分で何とか出来ないの？ 男の子って駄目ね、甘えてばかりでちっとも役に立たない」と怒られたこともあった。

それでもラボのスタッフが週に一度は様子を見に来て、掃除などの家事をしてくれるので、家の中はそれなりに整っていた。

あまりに度を超すとラボにばれただろうが、そこは上手くやったもので、母は完全にサウインを飢えさせたり、怪我をさせたりするほどの暴力をふるうことは決してなかった。

スタッフがやって来ると、母はいつも青い顔をして、「悪阻がひどい」だとか、「憂鬱でたまらない」といった症状を訴えていた。

それを見て、サウインは仕方がないのだ、と思うことにした。妊

娘とはとても大変なことなのだ。だからお母さんはほかのことがほとんど出来ないのだ。仕方がない　本当に？

どうして、母と暮らさなければならぬのだろうか？

一時期、自分から望んだことも忘れて、サウインは不思議に思うようになっていた。

ラボで暮らしていた頃のほうがずっと楽しかった。遊ぶ相手はたくさんいたし、スタッフに何でもやってもらえたし、大人たちは八つ当たりをしたり理不尽な理由で怒ることはなかった。

母という家族は、サウインには理解し難いものになっていた。

学校で人間社会のことを学び、家族というものについて教えられたが、それでもやはり、不可解だった。

「これはひとつの例なのだけれど」と、教師が映画のようなものを見せる。一人の男に一人の女という夫婦に、彼らの子どもたち。子どもは男の子と女の子が一人ずつ。この四人がひとつの家の中で暮らしている。なんて閉塞的なんだろう。国や民族によっては祖父母など他の血縁者まで一緒にいる。血縁という考え方は天使属には無縁のものだった。

北欧のコ・ハウジング（共同住宅）のように、比較的ラボに近い暮らし方をしている者たちもいたが、やはり人間の暮らしの基本単位は家族なのだった。恋愛と性と生殖を、彼らは結婚もしくはそれに準ずる関係によって家の中へ囲い込む。それはひどく不自由で息苦しい生活に思われた。

サウインだけでなく、天使属の子どもたちには家族というものは不可解なもので、教室は「なぜ？」の大合唱で紛糾した。

「どうしてマザーが産んだあと子どもと一緒に暮らしてるの？

あつ、料理もしてる。あの人はコックなの？」

「マザーじゃないよ。あの男の人が雇ってる家政婦かベビーシッターだと思っな」

「じゃあ、何であのおじさんは子どもと住んでるの？」

「それより、どうして人間の子どもは男の子と女の子だけなの？」

だが、中には、人間のような家族を欲しがる子もいた。

「だって、誕生日にパーティーしたりして、うらやましいよ」

「パーティーくらい、毎月してるじゃん。プレゼントだってくれるのに」

「でも、ママやパパって人たちは、僕だけをお祝いしてくれるんだよ。ここって何でも皆でやって、皆一緒だもん。つまらないよ」

自分だけを愛してくれて、甘やかしてくれて、欲しいものを何でも与えてくれる自分専用の大人、それがその子の思う親だったのだらう。親を魔法使いか何かと勘違いしているのだ。とんでもない。

そもそもサウインは、誰かを所有したいなど思わなかった。誰かに自分が所有されるのも嫌だった。子どもは親のもの？ そんな馬鹿な。ラボにいれば、誰の子でもない状態でいられたのに！常に母の顔色をうかがい、怯える日々が続いた。

妊娠中だから大変なのだと大人たちは言っていたが、ならばどうして息子を引き取ることにしたのだらう。毎日不可解でならなかった。より多くの生活費を得るためだと分かったのは、ずっとあとのことだった。

あの頃、母の腹が次第に大きくなっていくのが、とても恐ろしかった。あの中に赤ん坊が入っている。知識としてはそのことを知っていたけれど、樽のように膨れ上がった腹は自分の目にはまがまがしいほどで、赤ん坊ではなく、怪物でも孕んでいるように思われた。母は言った。

「サウイン、あなたもこうやって生まれてきたのよ」

母の胎内で血と肉を作られて。

サウインは混乱した。俺は俺ではないのか？ 俺は俺という一人の人間ではないのか？ 俺の体は、俺の命は、俺のものではないのか？ この肉の全て、血の全ては誰のものなのか？ 俺のものなのか、それとも母のものなのか？

やがて、月満ちて赤ん坊が生まれた。

赤ん坊は女の子で、ルーナサドと名付けられた。ルーナサドとは

ルーというケルトの神の名を冠された、八月に行われる一種の収穫祭で、ルナサともいう。母の名がベルティナ、ゲール語で「ベルの火」という意味で、五月一日のケルト人の祭りを表していたのになんだらしい。サウインの名も同様に、十一月一日に最も近い満月の日を新年としていたドルイドの祭りに由来する。このように、天使属の名前は国籍や性別にこだわらずにつけられ、たいていの場合、人間にあまりつけられない名前が選ばれる。

さておき、ルナサが生まれてから、サウインの生活は混迷を極めていった。母の出産前後は一時的にラボに戻ったので、そのままラボにいればよかったのかもしれないが、サウインはまた、母と暮らし始めていた。

「もう嫌！」

キッチンから母のわめき声が聞こえ、食器が割れる耳障りな音が響く。サウインはまたかとうんざりしつつも、母の暴力性におびえ息をひそめる。どこかへ行ってしまういたいと考えながら、母がヒステリックな声で自分の名前を呼ばないように祈る。何をしてもルナサが泣きやまなかつたりすると、母はサウインや物に当たり散らすのだ。

ある時、ガラスの破片を片付けようとしてサウインが指を切ったのを見た母は、なぜか怪我をしたのが自分であるかのように泣き出した。

「こんなの平気だよ。泣かないで」

サウインの呼びかけに母は答えず、ただ小さく「どうして」と繰り返しながら、すすり泣いていた。

母と暮らすのが苦痛になったサウインは、毎日あの手この手で家に帰るまいとしたが、結局は大人たちに家に帰されてしまうのだった。寮を出てラボの外に住んでいる子どもは、ご丁寧に送り迎えしてくれるので、帰宅しないわけにはいかなかった。

そのうちサウインは、街をぶらつくことを覚えた。

街にはたくさん人間がいて、たくさん建物があった。皆目的

を持って歩いていているように見えたが、サウインには何もなかった。ただぶらぶらしていた。目的もなく歩きながら、溺れているように思った。

まれに、本当に溺れているような人間も見た。彼らは一様に虚ろな目をして、路地に座り込んでいたり、おぼつかない足取りで同じところをふらふらしていたりした。

酔っ払い、下手をすればジャンキーなのだろう。ああいう人間には関わってはいけない。注意していたはずなのに、ある時、その類の男にぶつかってしまった。

「何だ、ガキ」

男に悪態をつかれ、サウインは逃げ出した。だが、逃げるサウインを男は追いかけてきた。怖くなって死にも狂いで走った。どちらへ向かっているのかも分からないまま、ただひたすら。無我夢中で走っているとふいに足がもつれ、転んだ。思わず目を閉じた次の瞬間、サウインは大人の男の腕に捕まえられていた。

「大丈夫かい、坊や」

恐る恐る目を開け、男の顔を見た瞬間、サウインは驚きに息を飲んだ。

男は、同属だったのだ。

それが、サウインの人生を変える運命の男との出会いだった。

「時々天使属の子どもを見かけるって聞いて、気になっていたんだ。この辺も物騒になってきたからね。送っていこう、家はどこだい？まさかラボから脱走してきたなんて言わないよな？」

男はアイド・グレイと名乗った。背が高く、金褐色の髪に青い目をしたかなりの美男子で、白人と見分けがつかないような顔をしていたが、サウインにはちゃんと彼が天使属だと分かった。一見しただけで人間と違うと分かる特徴があるわけではないが、CG映像のキャラクターを人間と見間違うことがないように、同属と人間を見誤ることはなかった。

「脱走なんかじゃない。ちゃんとお母さんと住んでるよ。住所は……」

アイドは母という単語を聞くと目を丸くし、「お父さんは？」と訊いた。父はいないが妹がいると答えると、けっこうなことだな、と言った。

「ちつともけっこうなんかじゃないんだ」

ついサウインは、家でのことをアイドに話してしまった。

「そうか。それは大変だな。……どうだい、ふらふらするのはやめて、私のフラットに来ないか？」

「えっ？」

「昼間はたいてい仕事でいないから、君は一人で宿題をしたり、ゲームでもしていればいい。家政婦も来るし、お腹が空いたりしたら彼女に頼めばいい」

それ以来、サウインはアイドのフラットに入り浸るようになった。オートロックの番号も教えてくれたので、サウインはいつでも好きな時に遊びに行くことが出来た。

アイドは部屋にいないことが多かったが、一人でも退屈することはなかった。部屋にあったコンピュータや電化製品は好きに使うこ

とが出来たし、小遣いもくれるので、金にも困らなくなった。彼は自分の職業を骨董屋だと言っていたが、まだ幼いサウインは骨董などに興味はなく、ただ彼が金持ちそうに見えるので、儲かるのだからうなだけ思っていた。

ごくたまにアイドの仲間もやって来た。アイドは彼らから「伯爵」と呼ばれていたが、天使属であるアイドが、貴族などではないのは明らかだった。皆がサウインに優しくかった。母の家を出てこの子になってしまったほうがいい、サウインはそう考えるようになっていた。それはまさしくアイドの思うつぼだったのだが。

部屋にいる時は、アイドはやたらとサウインをかまいたがった。

学校で何を習っているのか、好きなものは何か、何に興味があり、どんな友達がいるのか。まるで、子どもが親とするような会話を、二人はしていた。そのことがサウインは不思議と嫌ではなかった。嫌でないどころかむしろ、自分に関心を持たれることが嬉しかった。

時々サウインは部屋に泊まったが、そういう時はいつも、アイドと同じベッドで眠った。子どもといっても十二、三歳になっていた自分と、二十七、八歳の男と一緒に眠るといのはどう考えても怪しいが、その時はそんなふうには考えていなかった。たぶん、その頃の自分は、実際の年齢よりもずっと幼かったのだろう。本当はまだ、誰かに守られ、抱きしめられ、甘やかされたかったのだ。年は十五しか離れていなかったが、アイドはサウインにとって、見たことのない父親のような存在だった。

そうしてサウインは新しい保護者を得たわけだが、誰かに庇護されるということは、結局、自分の生殺与奪の権を相手に委ねてしまうことに他ならなかった。

母から解放された代わりに、サウインはアイドから性的な接触を受けるようになっていた。

最初は膝に載せられたり、ハグされたりといったコミュニケーションの範疇から始まり、同じベッドで眠るようになり、そのうちベッドの中で愛撫を受けるようになった。アイドは恐ろしいほどの忍

耐強さで、長い時間をかけてサウインを手なずけていった。

直接肌に触れられるようになった頃には、サウインは自分が体を売っているも同然なのだと理解するようになっていた。もらった金や品物がただであるはずがない。その見返りがこれなのだ。

嫌でなかったと言ったら嘘になる。だが、サウインはアイドを、自分を守り養ってくれる人を失ってしまうことを、何よりも恐れていた。

だから、何をされても従った。

ある夜、アイドの手が下半身に伸びてきた。それでもサウインは抵抗しなかった。

彼は言った。

「気持ちいいだろう?」

気持ち悪い。

嫌だ、こんなのは嫌だ。

悪夢のような時間の中で、サウインは祈っていた。

助けて……助けて、お母さん!

だが、母 ベルティナはもういなかった。

彼女は子どもたちの母親になりきれなかったのだ。ルナサはラボに保護され、サウインはアイドを自分たちの保護者に指名していた。そのためにサウインは、アイドから逃れられなくなっていた。

自分もルナサと一緒にラボに戻ればよかったのだろう。アイドが自分にやっていることは、完全に犯罪だったのだから。しかし、サウインは、一度知ってしまったためくもりを、手放すことが出来なかった。

サウイン、おいで。サウイン……

寝室からアイドの声がサウインを呼ぶ。その声はどこか淋しげで、捨てられるのを恐れている子どもは自分ではなくアイドで、自分のほうが大人であるかのような錯覚に陥る。

愛撫を受ける夜は続いた。

やがて、サウインが慣れてきたと見計らったアイドは、それ以上のことを試みた。

セックスは苦痛以上のなにものでもなかった。慣れたら気持ちよくなるとアイドは言ったが、それこそ忌避したい事態だった。

サウインはアイドに懇願した。

「あれだけはやめてくれ……これ以上やったら死んでやる」

すると、アイドは取引をしようと言い出した。

「サウイン、精子を提供してくれれば、二度と君を抱かないと約束する」

「精子を？ 何で？」

「子どもが欲しいんだ」

「自分ので作ればいいじゃないか」

「自分のはいらない。君の子どもが欲しいんだ」

「気色悪いな……誰が産むんだよ」

「女は何とかする。もちろん、君が女と寝る必要はない」

サウインは了承した。排出した精液がどう使われようが、そこから生まれてくる子どもがどうなるうが、知ったことではないと思っ
た。

かくして、子どもが生まれ、サウインは十五歳にもならない幼さ
で、父親になった。こんなに早く親になってしまうなんて、一年前
には思いもよらないことだった。いや、自分は全く親になどなれ
てはいなかった。遺伝子を伝えるだけでは人は親にはなれない。

時期的に女が妊娠する前だっただろうが、ある日、アイドは左目
を失って帰ってきた。

「どうしたんだ、その眼帯」

「目を女にくれてやった」

「何だつて？」

「子どもを産んでもらうためさ」

アイドは作り立ての義眼をサウインに見せた。

「私の右目が欲しいか？」

「いらぬ。約束だけで十分だ」

サウインがアイドの右目を見つめると、アイドは手の中で気味の悪い球体を転がしながら、微笑んだ。

「あんたが憎い。好きなんじゃないかって錯覚するくらいに」

「サウイン。私は君を愛している」

子どもが生まれて一年くらいたった頃、初めて「コ・イ・ヌール」と名付けられたその子に会った。名前はペルシア語で「光の山」を意味し、持ち主になると世界が手に入るといふダイヤの名からとられていた。

子どもは間性で、もう片言で喋ったり、よちよちと歩いたりするようになっていたが、自分に似ているかどうかは分からなかった。ただ、その子が、親から望まれたわけでもないのにモノのように作られたということ、不憫だと思った。

しかしそうは思っても、サウインは子どもに対して親らしい愛情を感じるなど出来なかった。妹のルナサのほうがまだ可愛かった。ろくにかまってやらなかったにもかかわらず、ルナサはいじらしいまでにサウインになついでいて、母や兄と暮らしたがっていた。サウインは母に対してとても腹が立っていた。母がすっかりしてさえいれば、こんなことにはならなかったのではないか……

「ルカによる福音書」の受胎告知の場面で、マリアが困惑して天使に言う。

「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」

子どもを前にして、自分も言いたかった。

「どうしてこんなことが？ 俺は女を知らないのに！」

アイドはロンドンのフラットを引き払い、ブリュッセルに移った。サウインもルナサを連れて彼について行った。アイドはルナサとコ・イ・ヌールをブリュッセル・ラボの保育所に預けたので、サウイン

は時々様子を見に行った。二人の幼児は実は叔母と姪（甥？）であることも知らずに、いつも仲よく遊んでいた。月日は流れ、サウインは十七歳になるうとしていた。

ある日、サウインが子どもたちのプレイルームを覗きに行くと、栗色の長い髪をした白衣姿のドクターが子どもと遊んでいた。たぶん小児科の医師なのだろうと、サウインは思った。

後日、何度かその人をラボの中で見かけた。ソラーヤと呼ばれているのも耳にした。またプレイルームに行くと、ソラーヤもいて、サウインに声をかけてきた。

「また会ったね。ルナサがお兄ちゃんって言ってたけど」

「妹なんです」

「兄弟なんだ。めずらしいね」

「そうなんです。父親は違うみたいだけど」

「でも、言われてみれば似てるかな」

ソラーヤは医師で、生殖医療チーム アルミサエル の所属だった。生殖医療班の医師はラボの頂点に君臨するエリート中のエリートだ。なぜなら、多くの天使属は彼らによって生み出されているのだから。

ソラーヤはルナサとサウインのことより、コ・イ・ヌール 通称コイ のことを気にしているようだった。アイドの子どもではないかと疑っているのだ。背が高く美しいソラーヤと、アイドが関係を持っていることにサウインは薄々気付いていた。

アイドが父親？ そんなことがあるものか。あの子は俺の子なんだからな！

ソラーヤにそう言ってやりたかったが、そんなことは言えなかった。

それよりもサウインには気になっていることがあった。

「あの人もドクターですか？ よくカフェで一緒にいる、メヘルさんも……」

ソラーヤの姿はラボのどこにいても目立った。そのソラーヤとよ

く連れ立っているもう一人の美人の存在に、ある時サウインは気付いた。名前はメヘル。ソラーヤとは対照的に、小柄で女性と見まがうような、可愛い人だ。そう、ソラーヤもメヘルも、天使属に最も多い、男でも女でもない間性だったのだ。

「メヘルはドクターじゃないよ。アロマセラピスト」
「いい匂いがすると思った」

間性の存在は、男も女も愛せないと思っていたサウインにとって、まさに救済だった。ラボを離れて久しかったので、世界には男と女しかないように思っていたのだ。

メヘルの姿を見ると、いつも胸が高鳴った。恋をしているのだと、サウインは自覚した。人形のように整った小さな顔、豊かな褐色の髪、メヘルの容姿は絵画から抜け出てきたかのようにだった。よくエスニック調のファッションをしているので、キリスト教以外の天使のように見える。近くに寄ると、エキゾチックなイランイランの甘く官能的な香りがして、いつそう心を惑わされた。

ソラーヤの美しさは圧倒的だったが、ある種男性的な威圧感を見る者に与えた。メヘルにはそういうところがなく、一緒にいる者にくつろがせる空気を持っていた。

サウインはいつの間にか、妹たちの様子を見るためではなく、メヘルに会うためにラボを訪れるようになっていた。

そして、そのことはアイドの知るところにもなっていた。

メヘルが人間の男たちに危害を加えられそうになった、と言い出したのはアイドだった。

その話を聞いて、サウインは最初血の気が失せ、次に頭に血が上り、全身が怒りで震え出しそうになった。

「許せない」

「別にレイプされそうになったわけじゃないが、許し難いことなのに代わりはない」

アイドの話によると、メヘルは交際していた人間の男との情事を、その男本人によって撮影されるところだったのだという。だが、交際相手が間性の体にひるんだため、助かったのだった。

「サウイン、我々はどういうことを決して許してはいけないのだ。そのために我々は存在している」

アイドは「我々」という言葉を、特別な意味を持って口にしていった。

「我々 エクス・ニヒロ は、仲間を守るために存在している」

「 エクス・ニヒロ ……? 」

アイドが単なる骨董屋ではないことを、何年もともに暮らしてきたサウインはすでに知っていた。

「ラボで習わなかったか？ ラボはそもそも、二十世紀の戦時下において、仲間たちを守るために組織を作ったことから始まった」

そのことならラボの学校で習っていた。天使属はもともと、人間に混じって暮らしていたが、戦時下に自衛手段として組織を結成し、集団生活を始めた。なぜ、それほど遺伝子の研究も進んでなかったであろう頃に、お互い「仲間」であることを認識出来たのかは謎だが、DNAレベルで呼び合う何かがあったのかもしれない。

それを指揮した組織が エクス・ニヒロ だった。

この言葉は「無からの創造」、すなわち「神の御業」を意味する。

「天使」たちをこの世に作り給うたのは偉大なる神の御業なりというわけだ。

メンバーは成人男性のみ、天使属のみならず、天使属に非常に友好的かつ協力的であれば、人間でも入会することが出来る。アイトが勤める骨董商 ルイス商会 の社長もその一人だった。

「男たちは間性や女性を守らなければならない」

「……ああ」

アイトは義眼になってから左目にかけるようになった片眼鏡越しに、サウインを見据えた。不思議なことに彼の作りものの左目は、右目と同じくちゃんと見えているように思われるのだった。

「仲間が傷つけられたら、復讐しなければならぬ」

目には目を、いやそれ以上に。

アイトの声音に、サウインは背筋が凍るような心地がした。

「サウイン、メヘルが好きなのだろう？ 二度と同じようなこと、もしくはもつとひどいことが起こってはいけない。そのためにすべきことが何か分かるか？」

「ああ、」

答えはしたものの、喉がからからに渴き、今度は恐怖で体が震え出しそうだった。

「ふさわしい男であれば、成人した時、君も我々の仲間を迎えられる」
サウインは数年前からアイトの手伝いで骨董商の仕事をしていた。ラボからドロップアウトしてしまった自分がこの先生きていくには、ルイス商会に雇われ、 エクス・ニヒロ のメンバーになるより道はなさそうだった。嫌だと言えば、即座に路頭に迷うだろう。

サウインは覚悟を決めた。

アイトの指示でサウインは、メヘルの交際相手だった男を交通事故を起こすように誘導し、結果的に死亡させた。

もう本当に戻れない

サウインはメヘルとソラーヤが住むアパルトマンに向かった。自

分の罪を告白したかったのだ。

部屋に辿り着くとソラーヤはおらずメヘル一人がいて、優しく話を聞いてくれた。

サウインはメヘルに想いを打ち明けた。メヘルはサウインを受け入れてくれた。アイドに抱かれた時は苦痛でしかなかったセックスは、自分が男になっていとしたしい人を抱いてみると、とても心地よく癒される行為だった。

大丈夫。大丈夫。

メヘルはサウインの頭や背中を母のように撫でながら、何度もその言葉を繰り返していた。

それ以来、サウインはメヘルの恋人の地位を得た。

よく、ラボで待ち合わせて一緒にアパルトマンへ帰り、二人で夕食を作ったりした。

ある時、待ち合わせのベンチに近付くと、メヘルの隣に人間の女性が座っていて、何か話していた。ゆったりしたワンピース姿の女性のお腹は大きく膨らんでいる。妊婦なのだ。

女性が立ち上がり、ゆっくりとした足取りで去ってゆくと、メヘルはサウインに気がついて手を上げた。

「さっきの……」

「マザー」

さっきの女性はサロゲートマザーだ。彼女の子宮の中では、天使属の胎児が育っている。

「時々、マザー相手のセラピーもやってるんだ。女の人ってすごいよね。自分の体の中で子どもを育てて産むんだから」

「そうかな。動物だってやってる」

つい、噛みつくように口を挟むと、メヘルはとがめるような目でこちらを見た。

「ここに来る女なんて、働かずに食うためにマザーになろうとする。そういうのはおかしいと思わないのか？」

「サウイン。私もそうやって産んでくれる人がいたから生まれたんだよ。そんなこと言うのはやめて」

サウインはひどく悲しくなった。今まで自分の身に起こったことの全てが、自分が子どもであることが、途方もなく悲しかった。

メヘルは何か察したのか、「帰ろう」と明るい声を出して立ち上がった。

サウインはその夜、ベッドの中でメヘルに全てを話した。母のこと、アイドのこと、精子を提供し、子どもが作られたこと。

長い話が終わると、メヘルは言った。

「サウイン。大人になって、ラボに精子を提供しなきゃいけないようになった時に、まだ私のことが好きだったら、一緒に子どもを作ろうよ」「メヘルと、俺が？」

「そう。私はもう採卵してるけど、今のところ子どもはいない。そのうち選出されて、受精させられるかもしれないけど、自分が選んだパートナーと子どもを作ること出来る」

二十歳になったらラボに配偶子を提供する義務があることを、すっかり失念していたサウインは、何をどう考えたらいいのか分からず目を白黒させた。

子どもというとサウインは、すでに存在している我が子コーイのことだけを考えてしまい、そうなるとアイドの手の中にあつた気味の悪い義眼のことばかりが思い出され、それは最も思い出したくない夜の記憶につながることであつたから、必然的に考えないようにしていたのだった。

「私やソラーヤは、アルミサエルのコンピュータが決めた精子と卵子の組み合わせで生まれた。コーイはアイドが無理矢理作ることを決めて生まれた。サウインとルナサは、たぶんお母さんが普通に好きな男性とセックスして生まれたんだろっね。生まれ方が違ってても、その人たちの価値に違いはないよ。でも、自分で決めて親になるの、いいんじゃないかなって、私は思う」

「大人になりたいんだ」

サウインはメヘルの言うことが十分に飲み込めず、自分の感情をどう言い表せばいいか分からなかった。何とかそれだけ言った。そして、少し考えてこうつけ加えた。

「本当に親になれたら、大人になれるかな」

「なれるよ。……なれると思う」

一回目は自信たっぷりな断言したのに、二回目は少々自信なさげになったメヘルを見て、サウインは微笑んだ。五歳も年上とはいえ、メヘルだってまだ親になることに自信はないのだ。

サウインは未来を思い描こうとした。大人になった自分、たぶん今とそれほど変わらないメヘル、そして自分たち二人の子ども……それはあまりにも漠然としていて、実感というものがまるでなかった。

けれどサウインはそこに、理想の家族像を読み取るうとした。親に対してこうであってほしかったと思うことを、今度は自分がやればよいのだ、きつと。

サウインは十分過ぎるほど若かった。人生の時間はまだたっぷりとあった。だから未来の自分に対して、他人に対するように期待することが出来た。

*

あれから十年以上の時が流れた。

紆余曲折あったものの、成人後サウインはメヘルをパートナーにし、子どもをもうけることが出来た。ルイス商会で働いている。そして、もう一人の我が子は美しく成長し、アイドと結婚しようとしている

父親のようだった男と、自分の子どもが結婚する。誰が考えても異常な事態である。

だがサウインは、それを冷静に受け止めていた。

アイドは自ら作り出した理想の花嫁の手によって、これまでに成した悪行の報いを受けるだろう。そんな気がしていたのだ。

コーイにはすでに自分が父親だと明かしてある。

本来子どもを得ることが出来ない男同士が、魂を売って得た呪われた子ども サウインは長い間、心のどこかでコーイをそのように思っていた。

だが、メヘルとの子どもが出来てみると、いきさつはどうであれ、コーイも大切な我が子であることに代わりはないと思えるようになったのだった。

もし、アイドがお前の幸せを阻害するようなことがあったら、その時は俺がアイドを殺してやる。それが、俺がお前に父親としてしてやれるたったひとつのことだ。

そう告げると、まだ幼いコーイは、「伯爵は僕を可愛がってくれてるから、そんなことあるわけないよ」と無邪気に笑った。サウインもそうだと思いたかった。アイドは自分に与えようとして拒まれたものをコーイに与えたいだけなのだ。自分と作るうとして上手くいかなかった「家族」を、コーイと作りたいだけなのだ。

家族 得てみるとそれは思っていたより単純なものだった。それなのにアイドは、いっどこで道を誤ってしまったのだろう。

それとも、本当に……自分を愛している？

そんな馬鹿な。

サウインはサイドテーブルの上に置いた エクス・ニヒロ の指輪を取り上げて、見た。

メンバーとして迎えられた時、アイドに手ずからはめられた指輪だ。

これで、本当に君は我々の仲間だ。

仲間。そう、自分たちは恋愛とはまた別の何かで強く結び付いている。

それが憎しみなのか、それとも他の何かなのか、サウインには分からない。自分たちの関係を表せる言葉が何かあるとしたら、一番

近いのはたぶん、共犯者。

いや、それともこれも、ある意味で「家族」なのかもしれない。

全ての者は、全能の父なる神の子ども……

サウインは指輪を戻し、笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0879z/>

エクス・ニヒロ

2011年12月17日10時50分発行